

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第408集

MUSHIRODA AOKI

席田青木遺跡 2

—第2次調査の報告—

1995

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第408集

むしろ だ あお き

席田青木遺跡 2

—第2次調査の報告—



遺跡調査番号 9304
遺跡略号 MAK-2

1995

福岡市教育委員会





SK-01 出土青磁碗



青磁碗出土状况

序

福岡市の東を画する刀隈丘陵は、地下鉄空港線の開通以来、新たな住宅開発が進んでいますが、この地には弥生時代以来の遺跡が数多く、古くから人々の好んだ土地であったようです。

このたび、民間の開発事業にともない、席田青木遺跡の2度目の発掘調査を行いましたが、その結果、以前の調査で確認された甕棺墓群の南への広がりを確かめるとともに、丘陵の斜面や麓にも、弥生時代や中世の集落や墳墓があることがわかりました。中世の井戸や土壙墓からは、四国の十瓶窯で作られた甕や、遠く中国大陸からもたらされた青磁碗や褐釉陶器も発見され、各地との盛んな交流がうかがえます。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上、役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでに、盛立建設株式会社中嶋凡夫氏をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成5（1993）年5月10日から同年8月5日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設と区画整理に伴う席田青木遺跡の第2次緊急発掘調査の報告書である。
2. 席田青木遺跡は、1981年発行の『福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）』で「青木遺跡群」とする遺跡であるが、福岡市域内には青木遺跡という名称が2カ所存在するので、1992年に実施した第1次調査に際し、西区今宿青木遺跡はそのまま青木遺跡（AOK）とし、博多区（旧席田村）に所在する青木遺跡は席田青木遺跡（MAK）とした。
3. 遺構の呼称は記号化し、甕棺墓をK、土坑・土壙墓をSK、掘立柱建物跡をSB、溝をSD、井戸をSEとした。
4. 本書に使用した遺構図は、今泉博子、尾園晃、岸本圭、足田敦、田中大介、八丁由香、濱石正子、東真一、平田こずえ、古屋俊英、本田浩二郎、撫養久美子、山脇健司、松村道博、白井克也が作成し、現場写真は、航空写真を空中写真企画が、その他を松村、白井が撮影した。遺物実測図は高田佳奈、濱石、撫養、白井が作成し、遺物写真は濱石、撫養、白井が撮影した。製図は衛藤琴美、高田、福岡三佐子、満保智恵、白井が行った。
5. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
6. 席田青木遺跡第2次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
7. 本書の執筆・編集は、松村の指導のもとに白井が行った。

遺跡調査番号	9304	遺跡略号	MAK 2
調査地地籍	博多区青木1丁目314番ほか	分布地図番号	022-A-2
開発面積	8,472m ²	調査対象面積	4,580m ²
調査期間	1993年5月10日～8月5日	事前審査番号	4-2-337、及び 5-2-48

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II遺跡の立地と既往の調査	2
III調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 弥生時代の遺構・遺物	6
(1)甕棺墓	6
(2)土塙墓	18
(3)土坑	20
(4)溝	20
3. 中世の遺構・遺物	24
(1)土塙墓	24
(2)井戸	24
(3)包含層ほか	26
4. その他の遺構・遺物	28
(1)掘立柱建物跡	28
(2)ピット群	28
IVまとめ	28
1. 甕棺墓の主軸方向と配置	28
2. 弥生後期・古墳時代・中世の集落	30
3. 中世の墳墓	30

図目次

Fig. 1 調査地点位置図 (1/5000)	2
Fig. 2 調査区全体図 (1/600)	3
Fig. 3 甕棺墓群配置図 (1/200)	4
Fig. 4 谷部遺構配置図 (1/200)	折込
Fig. 5 拡張区遺構配置図 (1/200)	5
Fig. 6 K-1・K-2甕棺墓出土状況実測図 (1/20)	7
Fig. 7 K-1・K-2甕棺実測図 (1/10)	8
Fig. 8 K-3・K-4甕棺墓出土状況 (1/20)、甕棺実測図 (1/10)	9
Fig. 9 K-5甕棺墓出土状況実測図 (1/20)	11
Fig. 10 K-6甕棺墓出土状況 (1/20)、K-5・K-6甕棺実測図 (1/10)	12
Fig. 11 K-7・K-8甕棺墓出土状況 (1/20)、K-7甕棺実測図 (1/10)	13
Fig. 12 K-9甕棺墓出土状況 (1/20)、K-8・K-9甕棺実測図 (1/10)	14
Fig. 13 K-10・K-11甕棺墓出土状況 (1/20)、甕棺実測図 (1/10)	15
Fig. 14 K-12甕棺墓出土状況 (1/20)、甕棺実測図 (1/10)	16
Fig. 15 K-13甕棺墓出土状況 (1/20)、甕棺実測図 (1/10)	17

Fig.16 K-14・K-15・K-16甕棺墓出土状況(1/20)、K-14・K-15甕棺実測図(1/10,1/5)	19
Fig.17 K-16甕棺(1/10)、SK-03出土状況(1/40)、SK-03出土遺物実測図(1/4)	20
Fig.18 SD-04出土状況(1/60)、出土遺物実測図(1/4)	21
Fig.19 SD-04出土遺物実測図(1/4)	23
Fig.20 SK-01・SK-02出土状況(1/20)、出土遺物実測図(1/4)	25
Fig.21 SE-01出土状況(1/40)、出土遺物実測図(1/2、1/4)	27
Fig.22 SB-01・SB-02出土状況実測図(1/80)	28
Fig.23 甕棺墓の主軸方向	29

図版目次

巻頭図版1 調査区全体写真

巻頭図版2 SK-01出土青磁碗

屏 甕棺墓群(南西から)

PL.1 調査区全体写真

PL.2 甕棺墓群

PL.3 谷部と拡張区の遺構

PL.4 K-1出土状況とK-1下甕

PL.5 K-2出土状況とK-2下甕

PL.6 K-3出土状況とK-3下甕

PL.7 K-4出土状況とK-4下甕

PL.8 K-5出土状況とK-5甕棺

PL.9 K-6出土状況

PL.10 K-7出土状況とK-7甕棺

PL.11 K-8出土状況とK-8下甕

PL.12 K-9出土状況とK-9甕棺

PL.13 K-10出土状況

PL.14 K-11出土状況とK-11甕棺

PL.15 K-12出土状況とK-12上甕

PL.16 K-13出土状況とK-13下甕

PL.17 K-14出土状況

PL.18 K-15出土状況

PL.19 K-16出土状況とK-16下甕

PL.20 SK-03・SD-04出土状況とSD-04出土遺物(番号は実測図と一致する)

PL.21 SD-04・SK-03出土遺物(番号は実測図と一致する)

PL.22 SK-01出土状況と青磁碗

PL.23 SK-02出土状況と出土遺物(番号は実測図と一致する)

PL.24 SE-01出土状況と土層断面

PL.25 SE-01出土遺物(番号は実測図と一致する)

PL.26 SB-01・SD-01出土状況

I はじめに

1. 調査に至る経過

1992(平成4)年12月22日、盛立建設株式会社代表取締役中嶋凡夫氏から、博多区青木1丁目314番ほかの開発計画事前審査願が提出された(第1次申請)。

申請地は席田青木遺跡の範囲内であり、弥生時代壺棺墓や古墳、近世墓などが調査された第1次調査地点から尾根沿いに南200mに位置しており、遺跡の存在が予想されたので、埋蔵文化財課では関係者と協議の上、1993(平成5)年1月20日、21日、26日に試掘を行った。申請地は開墾により階段状の削平を受けており、段ごとに試掘トレーナーを設定して試掘したところ、尾根の頂部近くでは弥生時代の壺棺墓が、谷部では中世の遺物が多量に、麓近くでは古墳時代の遺物若干が検出され、谷地形は自然地形を利用した山城の掘り割りの可能性も残った。弥生時代の墳墓と中世の集落の存在が確認されたため、遺跡の取扱いについて関係者と協議を行い、マンション建設のための削平の前に、記録保存のための発掘調査を実施することになった。盛立建設株式会社の受託調査として、1993年5月10日から調査を開始した。

調査開始に先立つ4月21日、後藤隆文氏ほか4名より、上述の第1次申請地の南に隣接する麓の部分、青木1丁目328-1ほかの開発計画事前審査願が提出された(第2次申請)。既に第1次申請地に遺跡が所在し、発掘調査を行うことが予定されていたので、埋蔵文化財課では関係者と協議の上、第1次申請地の発掘調査に並行して6月4日に試掘を行った。試掘の結果、柱穴・溝等の遺構が検出され、出土遺物から、第1次申請地同様、弥生時代と中世の遺跡が第2次申請地全体に広がっていることがわかった。第2次申請地についても遺跡の取扱いについて関係者と協議を行った。第2次申請に関わる開発は、一戸建住宅建設のための造成工事であったが、現地表から2~3mの盛り土を行うということであったので、遺跡が破壊されて道路となる部分のみについて、記録保存のための発掘調査を行うこととした。また、第2次申請地の施工業者は第1次の中請者である盛立建設株式会社であることから、既に実施されていた第1次申請地の調査を第2次申請地の調査対象部分にまで拡張することによって対応した。

これにより、調査面積は都合4580m²となった。調査は8月5日に終了した。

2. 調査の組織

調査委託：盛立建設株式会社 代表取締役 中嶋凡夫

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛

調査総括：文化財部長 後藤 直

埋蔵文化財課長 折尾 学

埋蔵文化財課第二係長 山崎純男

調査庶務：埋蔵文化財課第一係 吉田麻由美(前任)、西田結香

調査担当：埋蔵文化財課第二係 松村道博、白井克也

試掘調査：埋蔵文化財課第二係 荒牧宏行(前任)、菅波正人

調査作業：今泉博子 内山和子 永川カツエ 大石アヤ子 奥田弘子 蒲池雅徳 木須昭三

江田のり子 小島キサエ 後藤タミ子 是田敦 嶋ヒサ子 関義郎 田出橋和男

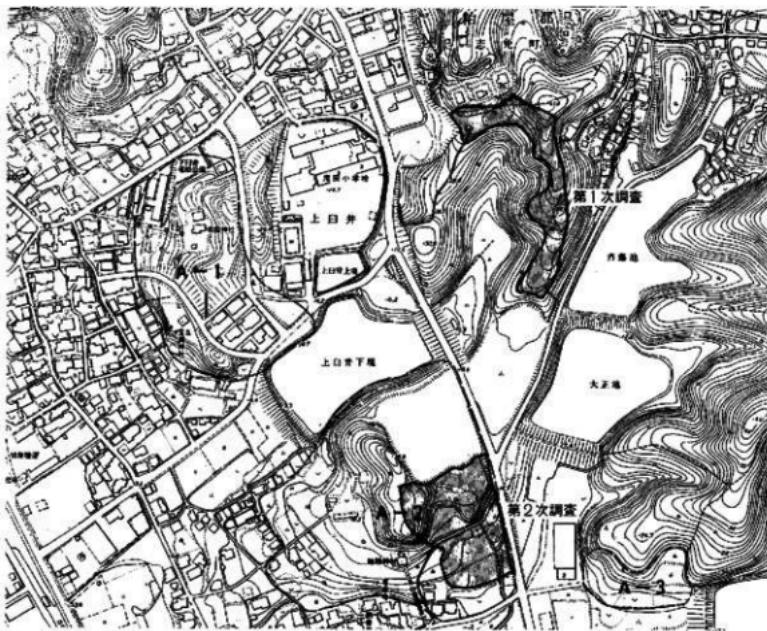


Fig.1 調査地点位置図 (1/5000)

田中大介 中川敏夫 野中辰雄 東真一 平田こずえ 平田百合子 古屋俊英
別府俊美 本田浩二郎 本多ナツ子 松村京子 村上エミ子 村本義夫 山本后代
山脇健司 吉川均 脇坂サツキ

整理補助：福岡二佐子

整理作業：井上涼子 菊藤琴美 小森佐和子 高田佳奈 土斐崎つや子 満保智恵 宮路由香
調査・整理協力：尾岡晃 岸木生 八丁由香 濱石正子 撫養久美子

II 遺跡の立地と既往の調査

席山吉木遺跡は福岡平野の東を画する月限丘陵の北端近くに位置する。月限丘陵には、久保間遺跡、大谷遺跡、赤穂ノ浦遺跡、宝満尾遺跡等が所在し、やや距離はあるが、下月限B遺跡、下月限天神森遺跡、金隈遺跡等も月限丘陵上に所在する。

第1次調査では、弥生時代の甕棺墓群、古墳、中世の城と溝、近世墓などが検出されている。

今回の第2次調査地点は、第1次調査地点の南200mあまりの地点であり、月限丘陵から南に延びる尾根の頂部からその東斜面を経て谷部にわたる地域を調査した。第1次調査の南に連なる位置にある。現在は両地点間の道路や造成地で切り離されているが、本来はひとつづきの丘陵であった。

当初、今回の調査でも第1次調査の如き様相になるであろうと予想していた。

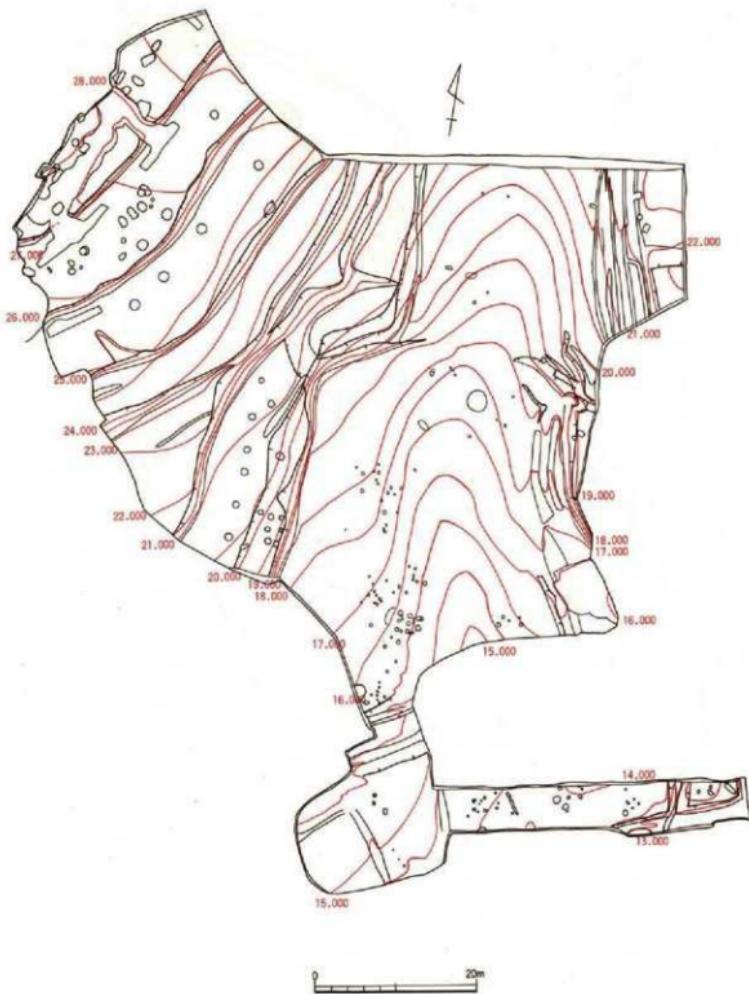


Fig.2 調査区全体図 (1/600)

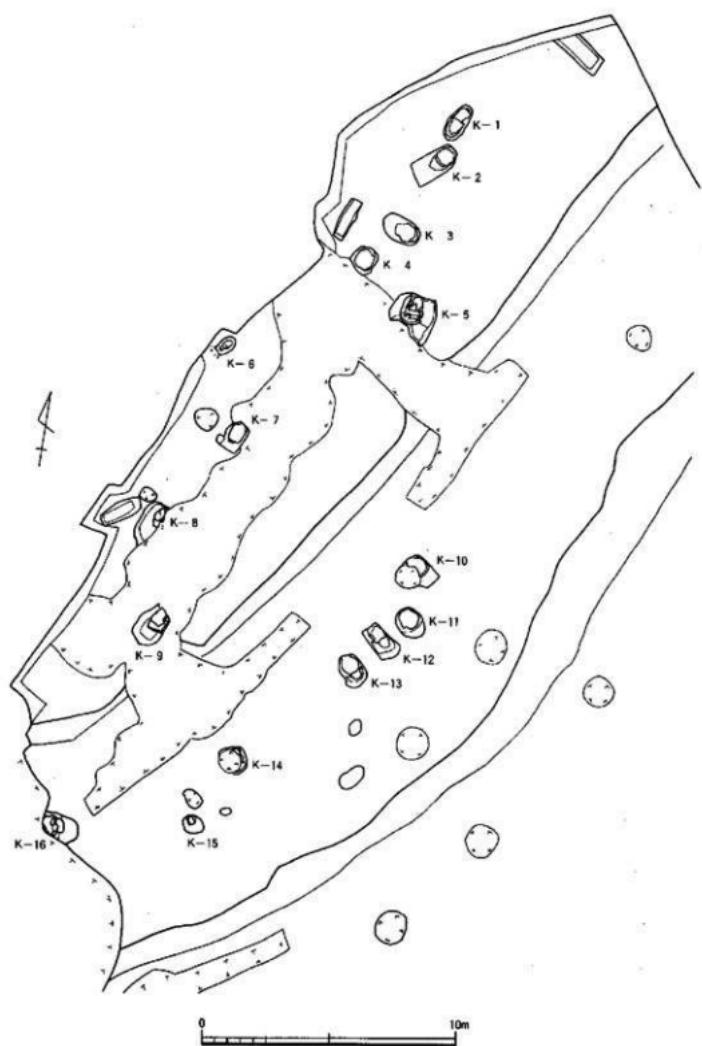


Fig.3 基岩群配置図 (1/200)

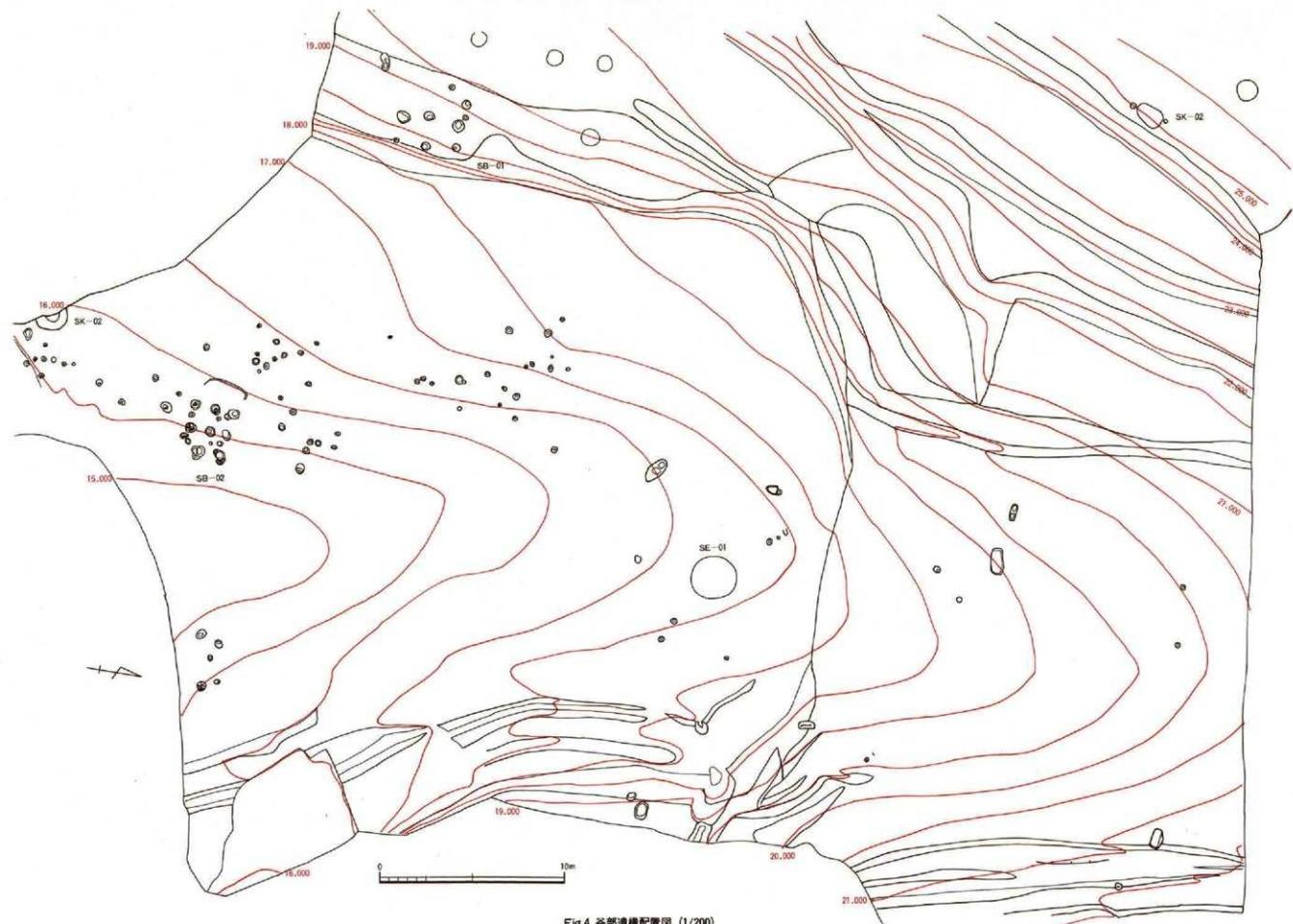


Fig.4 谷部造構配置図 (1/200)

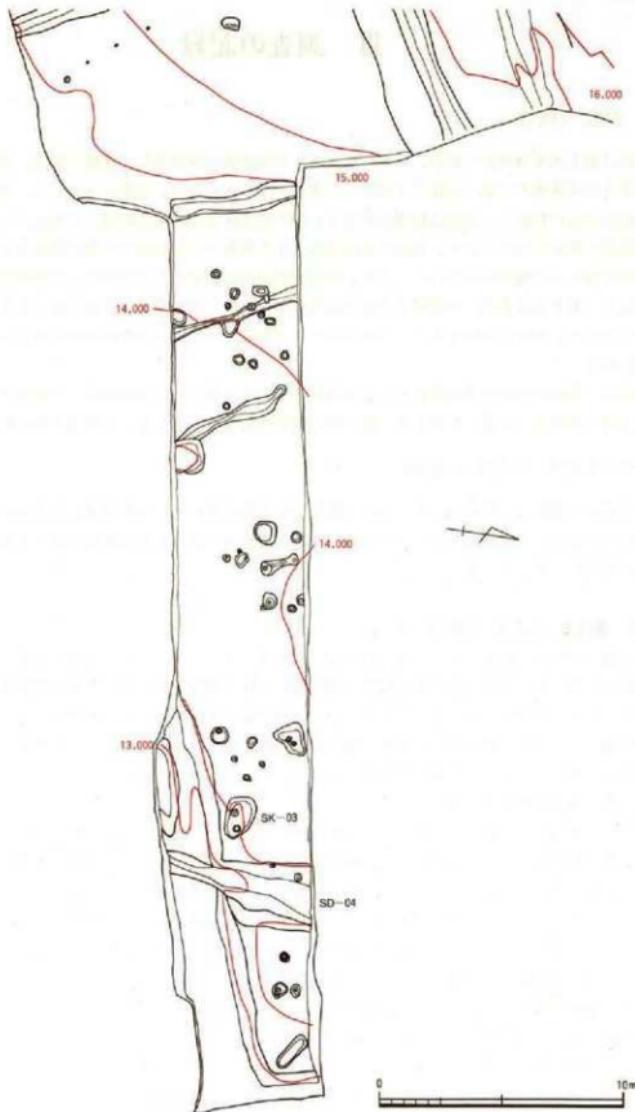


Fig.5 盐张区遗构配置图 (1/200)

III 調査の記録

1. 調査の概要

調査は第1次申請地から始め、尾根の頂上部から順次表土を除去し、遺構を検出、調査した。その後、第2次申請地の一部（道路予定部分）を調査することとなり、拡張区を設定し、調査した。

丘陵は赤褐色粘質土、谷部は暗褐色粘質土、麓の拡張区等は黄褐色粘質土を地山としている。丘陵は階段状の削平を受けており、頂部には防空壕による搅乱や、防空壕の天井が落盤したことによる遺構の原位置からの離脱がみられた。また、斜面を階段状に削平した平坦面に、円形の搅乱がいくつかみられた。第1次調査時に多数検出された近世墓を抜き取った穴かとも考えたが、各平坦面の縁辺部ばかりでなく、中程に位置するところからみて、近世墓ではなく、耕作に関わる何らかの施設の痕跡と思われる。

遺構は、尾根の頂部に壇棺墓16基と土壙墓状の掘り込み3カ所、丘陵斜面に上壙墓1基と掘立柱建物跡1棟と溝3条、谷部に井戸1基、麓に掘立柱建物跡1棟、溝1条、土壙墓1基が検出された。

2. 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、尾根頂上部と谷部の拡張区から検出された。尾根頂部は弥生時代中期の壇棺墓群であり、周辺に土壙墓状の堀り込みがみられる。拡張区では弥生時代後期の溝と土坑が検出され、集落の存在を示唆している。

(1) 壇棺墓 (Fig. 3, 図版屏, PL. 2)

壇棺墓は階段状に削平された丘陵の最上段（第I段とする）と、その下の段（第II段とする）に限定されており、K-1からK-9の9基は第I段に、K-10からK-16の7基は第II段に所在する。いずれも削平の影響は大きく、また、第I段では防空壕による搅乱と天井の落盤による原位置からの離脱が著しい。また、搅乱中に、壇棺の破片が集中的にみられる部分もあり、防空壕の建設に当たって壇棺墓が露出し、出土した破片を集めて片づけておいたためとみられる。

K-1 (Fig. 6・7, PL. 4)

第I段の標高28.5m地点に位置する。上壙は若干の削平を受けている。上壙と下壙の口縁部どうしを合わせた壇棺墓である。口縁部どうし接する部分に粘土を貼っている。上壙と下壙の口径に幾分差があり、棺の下面では接しているものの側面ではややずれ、上面ではずれが最大に達していたはずである。壇棺内に落ち込んだ破片は棺内の下近くに集中し、上蓋の破片も下壙側に入り込んでいるので、あまり棺内に泥が入らないうちに破損したものと思われる。主軸を北東に向か、N-37°-Eである。埋置角は14°。墓壙は長さ1.60m、幅0.74m、残存する深さ0.55mを測る。

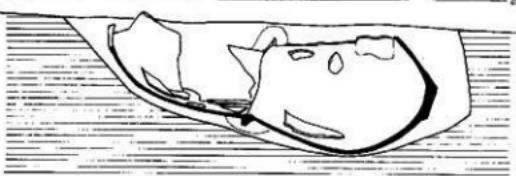
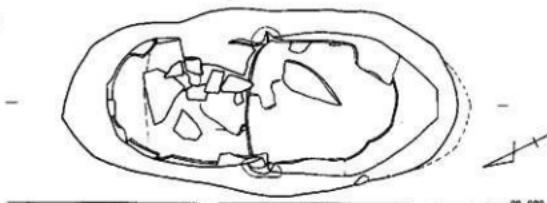
上壙は全体に摩滅が激しい。白色小礫を多量に含む。口縁端部に刻みを入れている。器高66.5cm、口径47cm、胴部最大径50.0cm、底径12.0cmを測る。

下壙も全体に摩滅が著しく、調整は不明である。1cm大の白色小礫を多量に含み、脆い。若干の企みがあり、器高67.2cm、口径55~60cm、胴部最大径50.0cm、底径12.0cmを測る。

K-2 (Fig. 6・7, PL. 5)

第I段の標高28.5m地点に、K-1と隣接して位置する。削平により上壙が削平されている。口縁

K-1



K-2

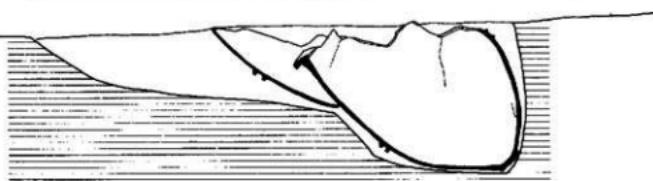
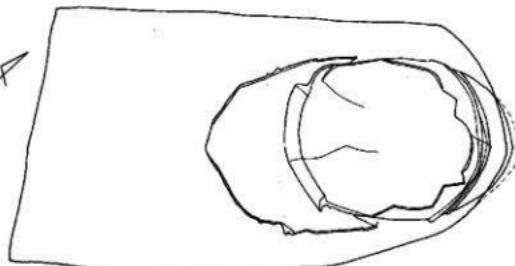


Fig.6 K-1·K-2號棺墓出土狀況實測圖 (1/20)

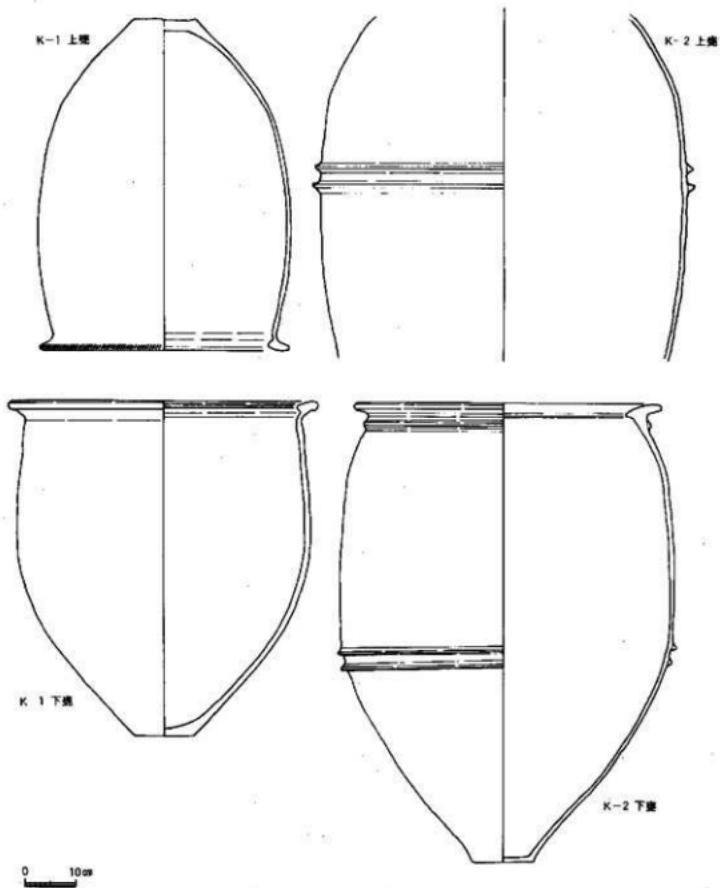


Fig.7 K-1・K-2壺形実測図 (1/10)

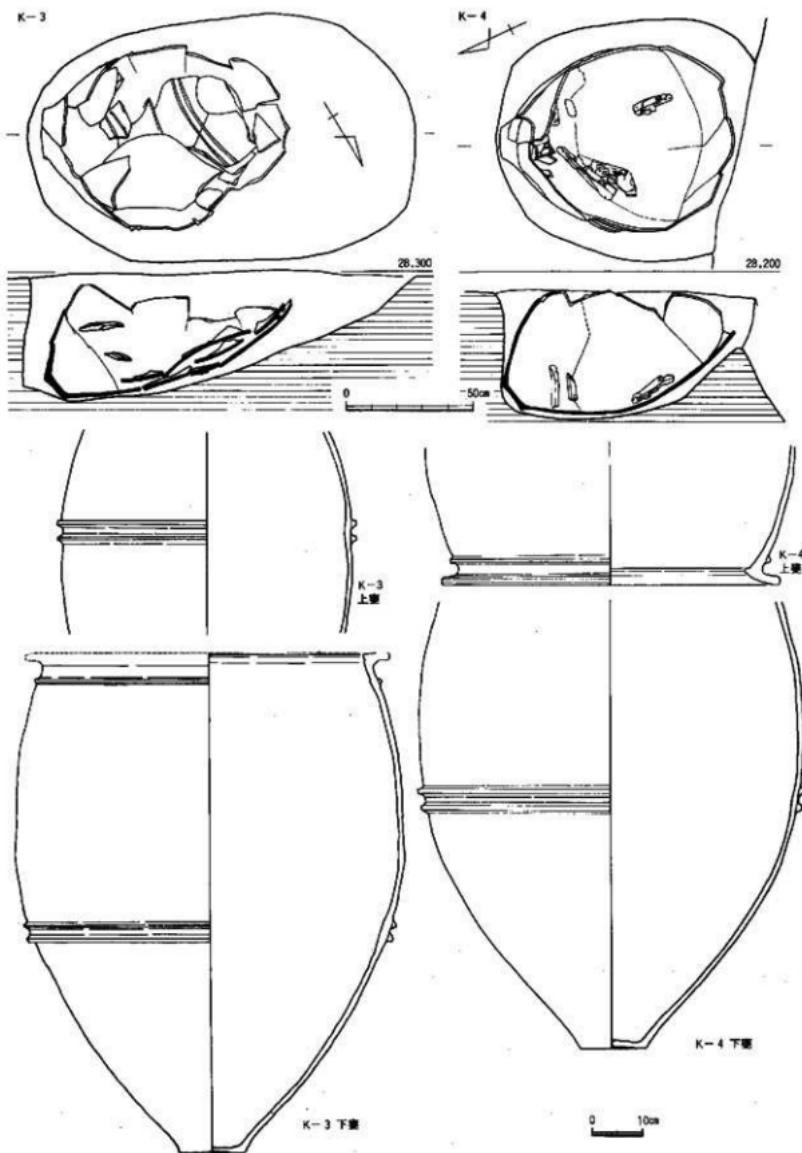


Fig.8 K-3·K-4 壺棺墓出土状況 (1/20)、壺棺実測図 (1/10)

部を打ち欠いた上妻を下妻にかぶせている。主軸を南西に向け、S-43°-Wである。埋置角は45°。墓壙は長さ2.00m、幅1.05m、残存する深さ0.62mを測る。

上妻は、口縁部が打ち欠きにより、底部が削平により失われ、胸部3分の1周程度が遺存する。4mm大の白色小砾を多量に含んで脆く、表面は摩滅が進んでいる。胸部に断面三角形の2条の突帯がめぐらしている。残存器高67.3cm、最大径は約76cmを測る。

下妻は、石英・白色砂粒を含み、やや脆い。口縁部下に断面台形の低い突帯1条、胸部下位に断面台形のやや低い突帯2条がめぐらる。器高91.9cm、口径59.9cm、胸部最大径65cm、底径12.0cmを測る。

K-3 (Fig.8, PL.6)

第I段の標高28.3m地点に位置する。削平により、下妻口縁部と上妻が原位置を失っているが、妻棺2個体に復元されたので合口妻棺墓であろう。主軸を西北西に向け、W-30°-Nである。埋置角40°。墓壙は長さ1.53m、幅0.98m、残存する深さ0.52mを測る。

上妻は胸部のみ3分の1周程度の残片である。法量からみて、口縁部を打ち欠いて、下妻の口縁部に挿入したものであろう。胸部に断面台形の突帯2条をめぐらす。残存器高40.5cmを測る。最大径は60cm程度と推定される。

下妻は、口縁端部を欠くが、上面がほぼ水平をなす。口縁部下に断面台形の突帯、胸部に上が断面三角形、下が断面台形の2条の突帯をめぐらす。内外面はナデ調整されている。器高100.2cm、最大径78.4cm、底径12.8cmを測る。

K-4 (Fig.8, PL.7)

第I段の標高28.1m地点に位置する。削平と、防空壕による搅乱で口縁部を失っている。原位置をとどめた妻棺に直接接合しない口縁部破片が出土しており、合口妻棺墓であった可能性も残る。棺内に大腿骨等が辛うじて遺存していた。妻棺の破片は棺内の上の方に多く、棺内に水が浸入して以後に破損したことがわかる。主軸を南南西に向け、S-25°-Wである。埋置角35°。墓壙は長さ1.03m、幅0.96m、残存する深さ0.52mを測る。

棺内に落ち込んだ口縁部破片（上妻か）は、口縁部が内傾面をなし、口縁部下に断面台形の突帯を貼り付けている。内外面ナデ調整。残存器高27.7cm、口径約68cmを測る。

原位置をとどめている妻棺（下妻か）は胎土に多量の砂粒を含む。口縁部を欠く。胸部に断面台形の突帯2条をめぐらす。内外面ナデ調整。残存器高89.8cm、最大径75.8cm、底径12.8cmを測る。

K-5 (Fig.9・10, PL.8)

第I段の標高28.2m地点に位置する。完存しないK-16を除けば、妻棺墓群中最大のものである。II縁部側（南側）に防空壕による搅乱が入っているが、上妻の存在した形跡はなく、本来単棺の妻棺墓だったとみられる。やや削平は受けているが、遺存はよい。棺内に落ち込んだ破片は浮いた状態であり、埋葬から破損までに時間差があったと思われる。主軸を南に向け、S-2°-Wである。埋置角22°。墓壙は防空壕による搅乱で南側が破壊されているが、長さ2.20m以上、幅1.86m、残存する深さ0.73mを測る。

妻棺は口縁部直下に低い1条の、胸部に高い2条の、断面台形の突帯をめぐらす。器高114.3cm、口径75.4cm、胸部最大径71.2cm、底径14.0cmを測る。

K-6 (Fig.10, PL.9)

第I段の標高27.9m地点に位置する。ほとんど削平され、遺存状態は悪い。1個体分の妻棺しか確認されなかつたが、合口妻棺墓かどうか不明である。主軸を南西に向け、S-45°-W程度であろう。妻棺の周囲に浅い掘り込みがあるが、K-6の墓壙として確実なものではない。

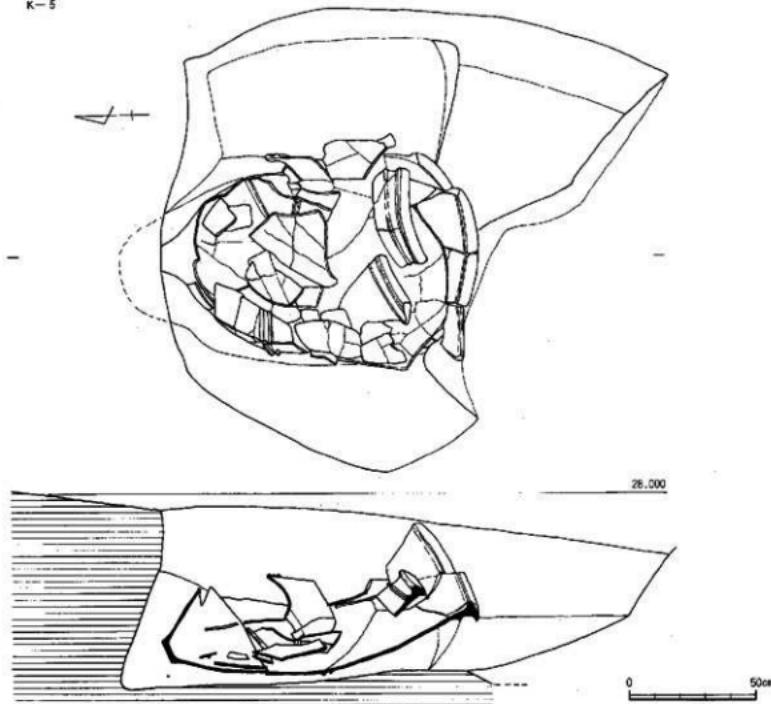


Fig.9 K-5要棺墓出土状況実測図 (1/20)

要棺は摩耗が著しい上、口縁端部と底部を欠いている。口縁部下と胸部に各1条の断面三角形の突帯をめぐらす。外面がナデ調整されている。残存器高60cm、口径35~36cm、胸部最大径45.3cmを測る。

K-7 (Fig.11, PL.10)

第I段の標高27.5m地点に位置する。削平により上部がほとんど失われているが、上要の形跡は全くみられず、单棺の要棺墓とわかる。棺内に落ち込んだ要棺の破片は、下要底部付近にはほとんどみられない、下要胸部中央寄りに集中している。上軸を南南西に向け、S-29°-Wである。埋置角38°。墓墳は長さ1.18m、幅0.92m、残存する深さ0.78mを測る。

要棺は、口縁部が曲線的に外反し、全体に丸みを帯びる。口縁部下に断面三角形の、胸部にも断面三角形に近く高い2条の突帯をめぐらす。石英・白色砂粒を含む砂っぽい胎土で作られ、全体に摩滅が著しい。器高86.1cm、口径約54.2cm、胸部最大径66.5cm、底径11.4cmを測る。

K-8 (Fig.11・12, PL.11)

第I段の標高27.5m地点に位置する。削平は要棺には及んでいないが、要棺の下に作られた防空壕

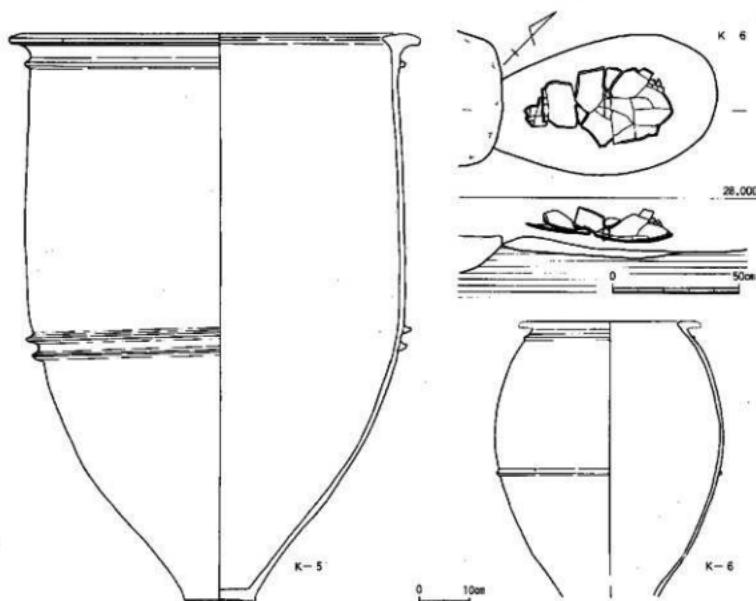


Fig.10 K-6斎棺墓出土状況 (1/20)、K-5・K-6斎棺実測図 (1/10)

の天井が落盤したため、東半分が下方にずれ落ちている。原位置では斎棺1個体分が出土したが、防空壕に落ち込んだ土器片等を検討した結果、複数個体分がみられたので、合口斎棺墓の可能性がある。棺内に斎棺の破片が落ち込んだ形跡ではなく、破損以前に棺内に浸水したことがわかる。主軸をほぼ南に向け、S-9°-Eである。埋置角25°前後。墓壙も防空壕の落盤によって半ば失われているが、長さ1.85m以上、幅1.20m以上、残存する深さ0.62mを測る。

上斎は、防空壕による落盤に落ち込んだ土器片から復元したものである。口縁部・胸部上位の破片と胸部下位・底部の破片があるが、互いに接合せず、薄くて脆い。口縁部・胸部上位破片の残存高31.0cm、胸部下位・底部破片の残存高15.5cm、口径43.4cm、胸部最大径44.4cm、底径11.6cmを測る。

下斎は、口縁部下に断面三角形、胸部最大径部に断面台形の高い突帯2条をめぐらす。器高89.6cm、口径54.9cm、胸部最大径71.2cm、底径14.7cmを測る。

K-9 (Fig.12, PL.12)

第1段の標高26.7m地点に位置する。尾根頂部の防空壕の上にあり、落盤で原位置より沈んで横断面形が方形状になるほどである上、底部付近が失われている。単棺の斎棺墓である。現状での主軸は南西でS-42°-W、埋置角は20°前後である。墓壙は長さ1.6m以上、幅1.15m、残存する深さ0.5mを測るが、いずれも落盤のため必ずしも旧状をとどめてはいない。

斎棺は、白色砂粒を含み、口縁部下に低い断面三角形突帯1条、胸部に断面台形の突帯2条をめぐらす。残存器高80.6cm、口径67.0cm、胸部最大径は上位にあり、74.0cmを測る。

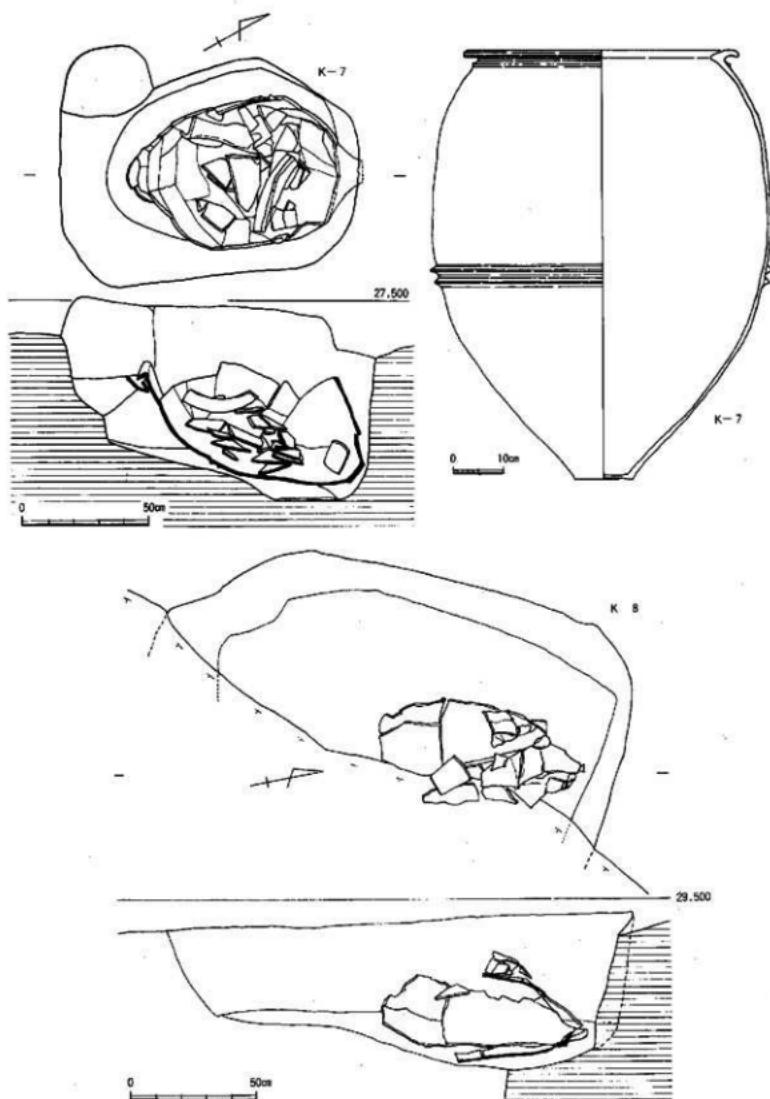


Fig.11 K-7・K-8要棺墓出土状況 (1/20)、K-7要棺実測図 (1/10)

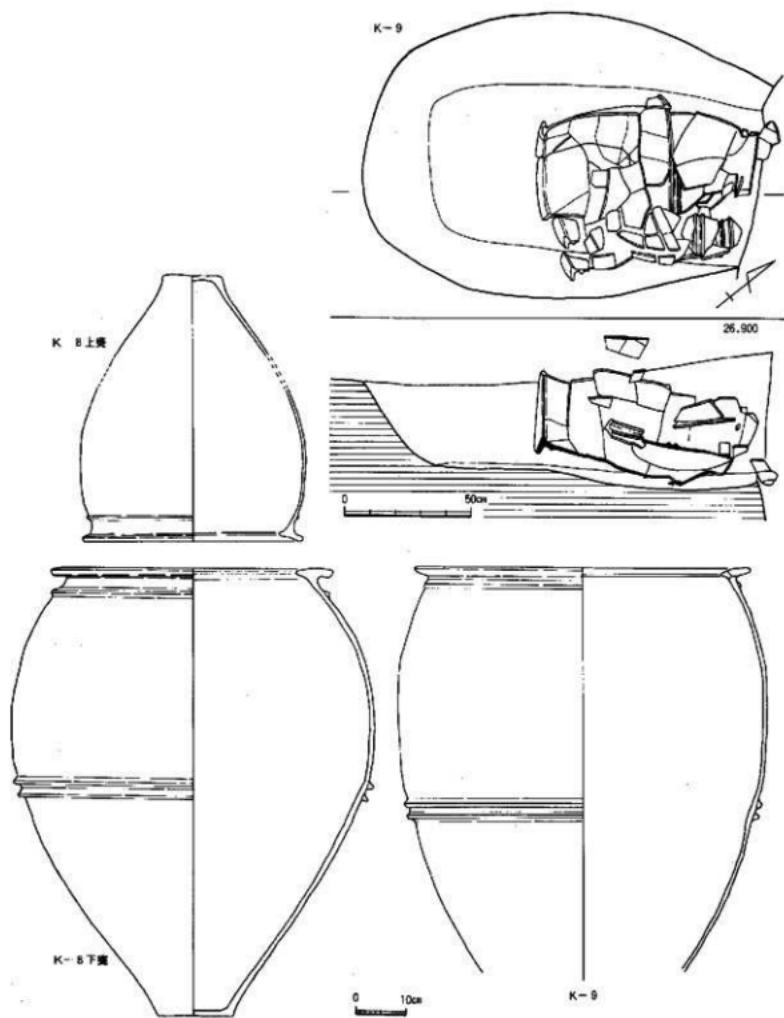


Fig.12 K-9 麋棺墓出土状况 (1/20)、K-8·K-9 麋棺实测图 (1/10)

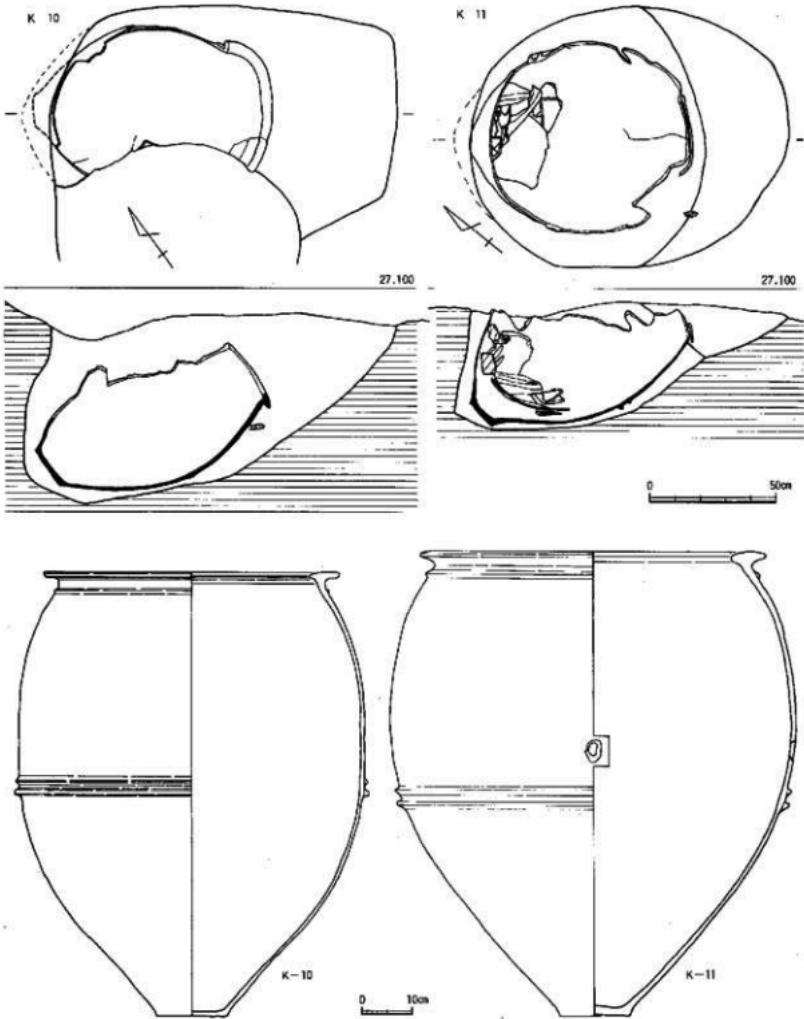


Fig.13 K-10·K-11壺棺基出土狀況 (1/20)、壺棺實測圖 (1/10)

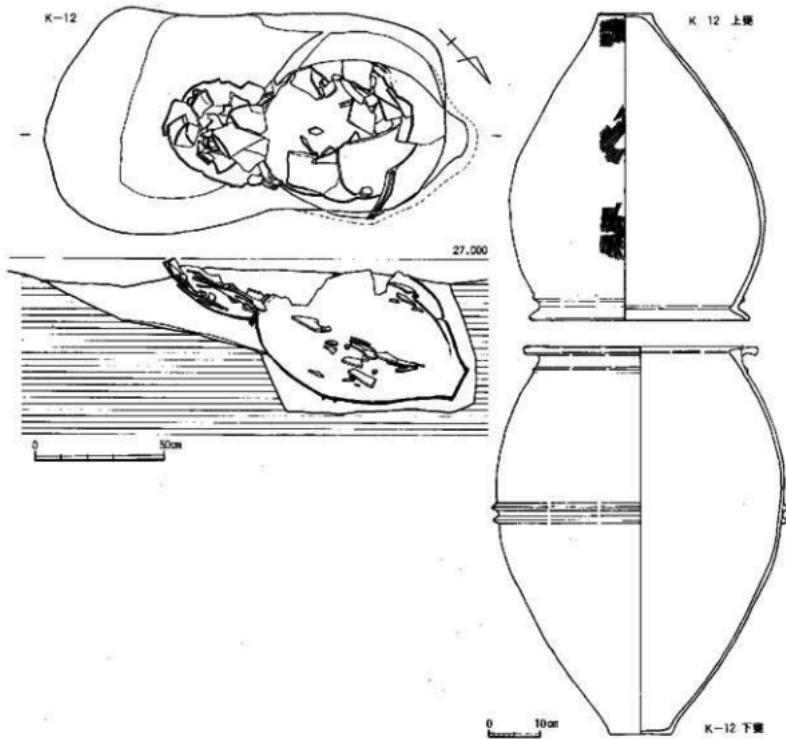


Fig.14 K-12號墳出土状況 (1/20)、斎棺実測図 (1/10)

K-10 (Fig.13, Pl.13)

第II段の標高27.0m地点に位置する。削平の影響はさほど受けていないが、南に円形の擾乱があり、これによって一部破壊されている。また、調査当初は斎棺上面もほぼ原位置をとどめていたが、調査期間中に雨天が続いたため、一部が破損した。出土状況の実測図は破損後に作成したものである。上蓋とみられる形跡は全くなく、単棺の斎棺蓋である。ほとんど破損していないだけに、棺内には斎棺の破片が全く落ち込んでいなかった。埋没後早くに水が侵入したか、木蓋が腐朽したのだろう。主軸を南東に向け、E-35°-Sである。埋置角32°。墓廣は長さ1.49m、幅0.9m以上、残存する深さ0.76mを測る。

斎棺は薄手で摩滅が進んでいる。口縁部下に断面三角形突帯1条、胸部には上が断面三角形、下が断面台形をなす2条突帯をめぐらす。器高88.6cm、口径57.9cm、胸部最大径67.8cm、底径13.6cmを測る。

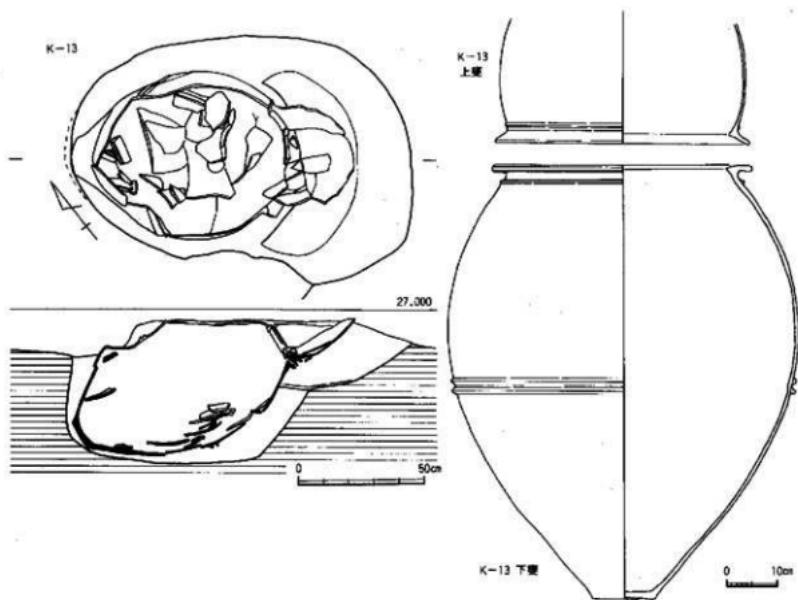


Fig.15 K-13斂棺墓出土状況 (1/20)、斂棺実測図 (1/10)

K-11 (Fig.13, PL.14)

第II段の標高27.0m地点に位置する。口縁部が削平により失われているが、上窓の形跡はなく、単柵の斂棺基であろう。棺内の比較的奥の部分に斂棺の破片が落ち込んでおり、その中に15cm大の角礫が入っている。主軸を南東に向け、S-40°-Eである。埋置角41°。墓墳は長さ1.3m、幅1.04m、残存する深さ0.51mを測る。

斂棺は全体に丸みを帯び、口縁部下に断面三角形突帯、胸部に上が断面三角形、下が断面台形の突帯をめぐらす。また、胴部に内側からの穿孔がある。器高93~95cm、口径68.4cm、最大径80.4cm、底径13.8cmを測る。

K-12 (Fig.14, PL.15)

第II段の標高27.0m地点に位置する。削平を受け、特に上窓はひどく破損しているが、上窓と下窓が口縁部どうしを接している合口斂棺基である。上窓の破片は上窓の下面についているが、下窓と一部上窓の破片は、下窓内の浮いた位置にある。さらに下窓上面の一部は、下窓に沿ってややすり落ちた位置にあり、時間をおいて少なくとも2回以上破損があったことがわかる。主軸を南東に向け、E-42°-Sである。埋置角27°。墓墳は長さ1.70m、幅0.90m、残存する深さ0.6mを測る。下窓を埋置する部分のみ深くなるように2段に掘っている。

上窓は、やはり摩滅が著しいものの、外面にタテ方向、及び一部ナナメ方向のハケを施した後ナデたことが窺える。口縁部下に断面三角形の低い突帯をめぐらす。器高61.6cm、口径43.2cm、胸部最大径49.5cm、底径10.8cmを測る。

下壺は、出土状況では完存に近かったが、劣化が激しく、遺構からの取り上げ時に、湿った煎餅のように湾曲するほどであった。口縁部上面は内傾面をなす。口縁部下に断面三角形の低い突帯1条、胴部に断面三角形のやや高い突帯2条をめぐらす。器高は不明確だが77cm程度、口径約51.2cm胴部最大径約57.0cm、底径12.0cmに復元できよう。

K-13 (Fig.15, PL.16)

第II段の標高27.0m地点に位置する。削平を受け、特に上壺はひどく破損しているが、上壺と下壺が口縁部どうしを接している合口壺棺墓である。壺棺の破片は棺内下面のやや浮いた位置にあり、埋葬後、やや時間をおいてから破損したことがわかる。主軸を南東に向け、E-39°-Sである。埋置角31°。墓壙は長さ1.35m、幅1.00m、残存する深さ0.56mを測る。

上壺は遺存部分が少なく、復元が充分ではない。口縁部上面は内傾する。口縁部下に断面三角形の低い突帯をめぐらす。残存器高23.8cmを測る。図示に当たって口径は下壺を参考にした。

下壺は全体に丸みを帯び、口縁部下に1条、胴部に2条の断面三角形突帯をめぐらす。摩滅が進み、調整は不明である。器高87.3cm、口径51.2cm、最大径69.4cm、底径12.2cmを測る。

K-14 (Fig.16, PL.17)

第II段の標高26.7m地点に位置する。削平と円形の搅乱によって破壊されており、壺棺もかなり失われているが、上壺の存在は確認できず、単棺の壺棺墓と思われる。主軸を南に向け、S-2°-E程度であろう。埋置角38°。墓壙も搅乱で破壊されているが、長さ1.2m、幅0.95m以上、残存する深さ0.45mを測る。

壺棺は底部付近しか復元しえなかった。摩耗は著しいが、ナデ調整が確認された。底径12.0cmを測る。

K-15 (Fig.16, PL.18)

第II段の標高26.7m地点に位置する。小児棺とみられる。削平され、壺1個体しか確認されなかつた。上軸を南東に向け、E-42°-Sである。埋置角30°。墓壙は長さ0.8m、幅0.75m、残存する深さ0.16mを測る。

壺棺は胴部に2条の断面三角形突帯をめぐらす。残存器高27.5cm、胴部最大径34.0cm、底径10.4cmを測る。

K-16 (Fig.16・17, PL.19)

第II段の標高26.5m地点に位置する。全体に削平されている上、調査区の端に位置しているため、崖で下壺の西半が失われている。上壺は口縁部を打ち欠いて、下壺の内側に差し込んでいる。主軸をほぼ東に向け、E-3°-Sである。埋置角20°前後。墓壙もかなり失われているが、長さ1.5m以上、幅1.1m以上、残存する深さ0.5mを測る。

上壺は胴部突帯以下しか遺存せず、口縁部は打ち欠かれたものとみられる。最大径部に断面台形の突帯2条をめぐらす。残存器高62.6cm、最大径62cm、底径12cmに復元される。

下壺はかなり大型で、胴部突帯以下は失われている。完存していれば、今回の調査で最大の壺棺であったはずである。胴部最大径は高い位置にある。口縁部下に1条、胴部に2条の断面台形の突帯をめぐらす。調整は摩滅のため多く失われているが、ナデ調整が確認される。残存器高62.7cm、胴部最大径82.8cm、口径87.0cmを測る。

(2) 土壙墓 (Fig.3)

第I段の壺棺墓群に混じって、長方形の掘り込みが3カ所みられた。木棺痕跡は確認されず、出土遺物もなかったが、第1次調査での所見からみて、壺棺墓群より若干遅る時期の土壙墓である可能性

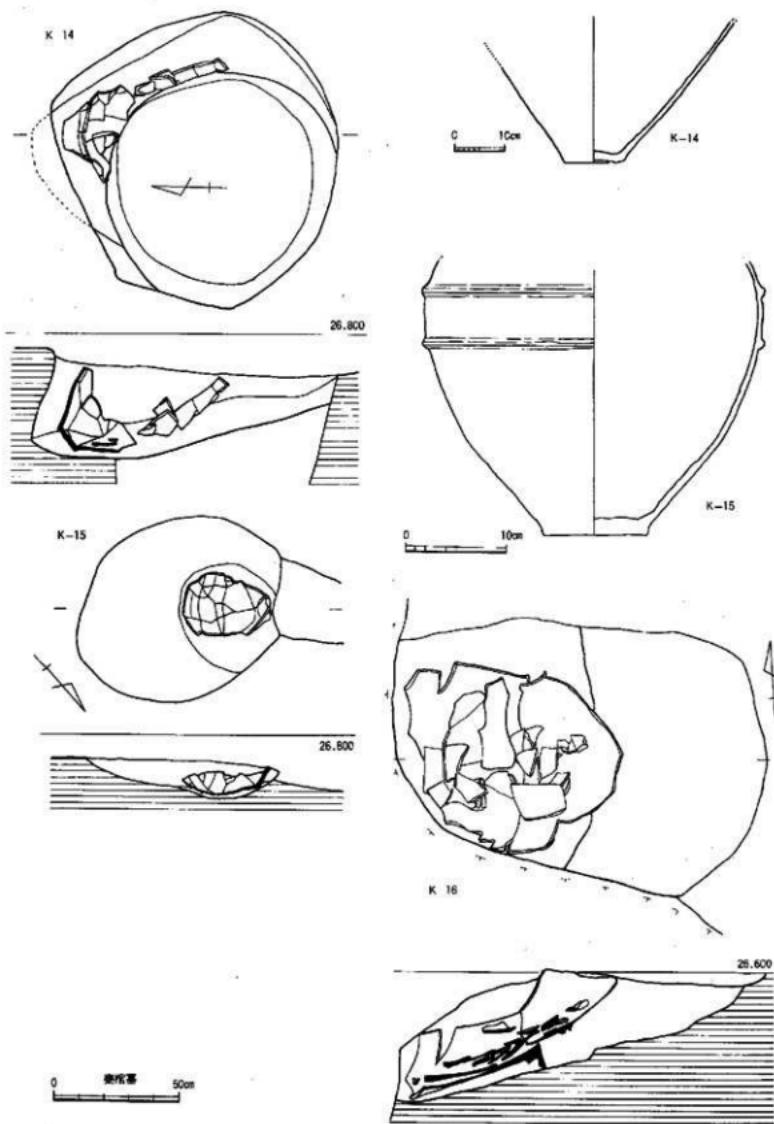


Fig.16 K-14·K-15·K-16 瓢棺墓出土状況 (1/20), K-14·K-15 瓢棺実測図 (1/10.1/5)

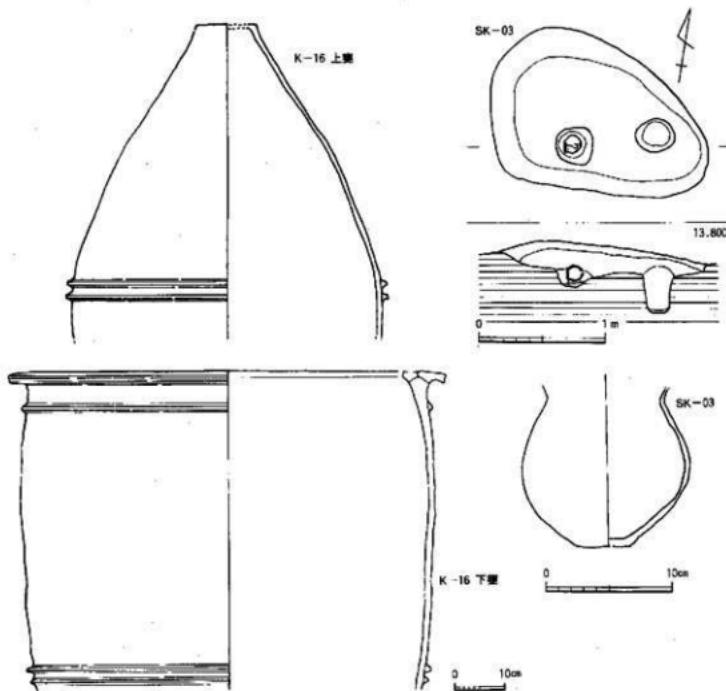


Fig.17 K-16要館 (1/10)、SK-03出土状況 (1/40)、SK-03出土遺物実測図 (1/4)

も捨てきれない。

(3) 土坑

SK-03 (Fig.17, PL.20・21)

丘陵縁の拡張区の標高13.6m地点で確認された。不整な三角形を呈し、東西1.8m、南北1.3m、残存する深さ0.2mを測る。底にピット2基がある。

遺物は無頸壺が1点出土した。口縁部を欠くがほぼ完形で、器面の摩滅が激しい。底部は凸状をして安定を欠く。残存器高13.0cm、胴部最大径13.3cm、底径4.1cmを測る。

(4) 溝

SD-04 (Fig.18・19, PL.20・21)

拡張区の標高12.5～13.8m地点で、調査区を横断するように確認された。階段状の削平により、南側で狭く浅くなっている。幅は最大で2.8m、深さは最大で0.4mである。ほぼ南北方向であり、底面は北に高く、南に低い緩傾斜をなす。水の流れた様子はない。最下層の黄褐色砂質土の薄い堆積（第

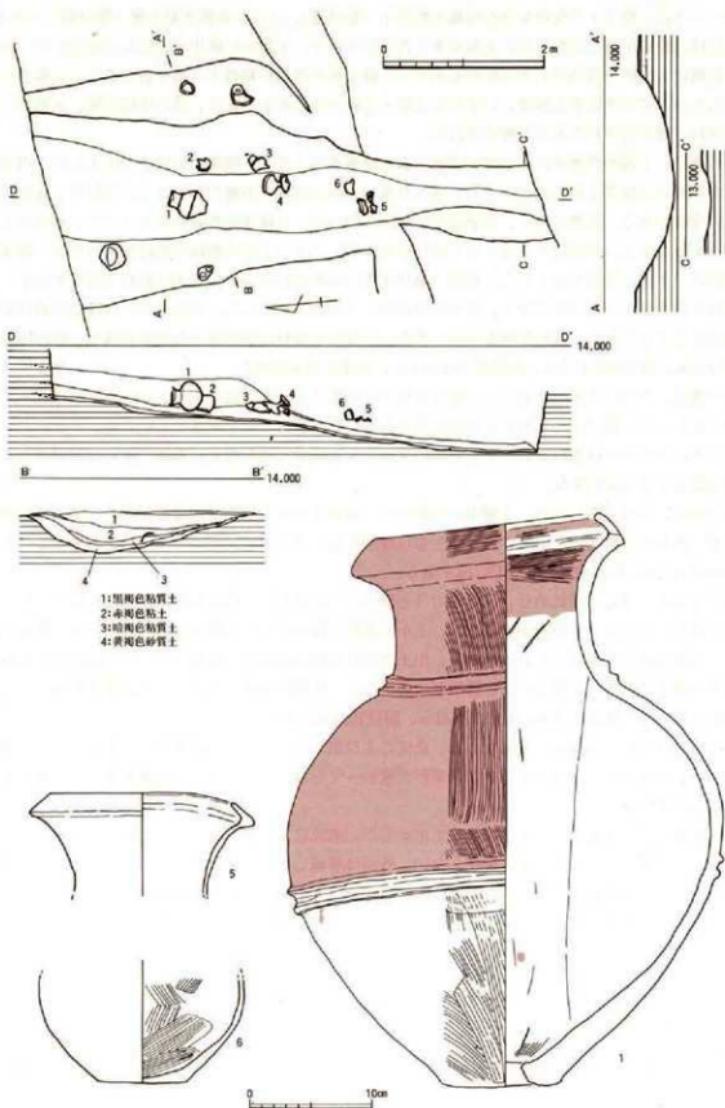


Fig.18 SD-04出土状况 (1/60)、出土遗物实测图 (1/4)

4層)の上に、焼土・炭化物を含む暗褐色粘質土(第3層)、さらに赤褐色粘土層(第2層)がある。この2枚の粘質土層に完形に近い土器が多く含まれており、土器の小破片はほとんど含まれていない。特に2層は人為的な埋め戻しの可能性もある。最上層の黒褐色粘質土(第1層)からは土器小片が出土した。図に示す完形土器は、いずれも2層・3層からの出土であり、溝の使用の後、土器が括廃棄され、埋め戻されたものと推定される。

1の壺は、下端が3層中に、上端が2層上面に位置するように、横倒しの状態で出土した。内面には、廃棄時の口縁部上端の高さまで入り込んだ水の水面の位置に剥離がみられる。完形で、底部に焼成後の穿孔がある。器壁は厚く、底部はやや膨らんでいる。口縁部内外面のみヨコハケ、頸部以下の外面はタテハケで、内面はナデ消されてはいるものの、ハケメ工具の側線の痕跡がみられる。胴部と口縁部に2条ずつ突帯をめぐらし、胴部の第2突帯のみ断面台形、他の3条は断面三角形を呈す。突帯貼付後に突帯上下をヨコナデし、該当部分のハケメが消されている。外面上半と口縁部内面に赤色顔料が塗布されており、流れた跡もある。また、内面にも顔料の滴が落ちた痕跡が残る。器高46.4cm、口径18.4cm、頸基部径17.2cm、胴部最大径35.8cm、底径10.0cmを測る。

2の壺は、下端が4層の上面に、上端は2層中に位置する。壺が縦に割れた状態で、口縁部を下に向けて出土した。投げ込んで割れたものと思われる。外面はほとんど摩滅しているが、タテハケメが観察でき、内面は口縁部にヨコハケ、胴部にタテハケを施す。残存器高17.6cm、復元口径17.0cm、胴部復元最大径18.5cmを測る。

3の壺は、3層上面にのり、2層中に位置する。胴部4分の1周程度が遺存するが、2とは別個体である。外面が黄褐色を呈し、外面とも口縁部付近にヨコナデ、胴部にタテハケを施している。残存器高19.4cm、胴部復元最大径19.7cmを測る。

4の高杯は、3層上面にのり、2層中で3と隣接した位置から、口縁部を下に向けて出土した。大きく2破片に分かれ、その出土状態から、上から高杯を投げ捨てた状態を示すと思われる。摩滅が著しく、口縁部をかなり失ってしまったが、出土当初は口縁部もかなり遺存していた。図示した口縁部の傾きは確定的なものではない。口縁端部に面をなす。杯部内面の一部にハケメ、脚部内面にシボリ痕が観察される。器高22.5cm、復元口径31cm、脚径19.3cmを測る。

5の壺口縁部は、2層中より出土した。造成により削られており、口縁部2分の1周程度しか遺存しない。歪みがあり、半周するうちに断面形が変わってしまうほどである。摩滅も激しい。残存器高8.4cm、口径15.2cmを測る。

6の壺胴部は、2層中より5と隣接して出土した。造成により削られており、胴部最大径以下しか遺存しない。底部はやや膨らみ、安定しない。外面は摩滅しており明黄色を呈するが、内面は淡褐色で、ハケメを良好に遺存する。残存器高8.5cm、胴部最大径16.9cm、底径7.4cmを測る。

5と6は同一個体の可能性もある。

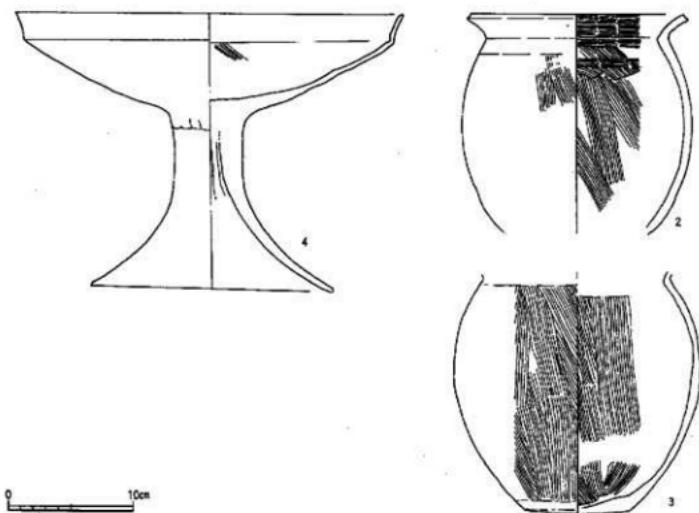


Fig.19 SD-04出土遺物実測図 (1/4)

3. 中世の遺構・遺物

中世の遺構は、丘陵斜面と谷部にかけて所在する。斜面とその麓には土壙墓が2基確認されているが、階段状の削平の縁辺に位置するところからみて、丘陵斜面は削平前に中世土壙墓群であった可能性もある。

谷部では、確実な中世の遺構は井戸のみであったが、谷部の包含層からも青磁の破片が検出されており、中世の集落が存在した可能性が高い。

(1) 土壙墓

中世土壙墓は、丘陵斜面中腹と、谷部付近の2カ所で検出された。階段状の削平がなければ、さらに何基かの土壙墓が存在したであろう。

SK-01 (Fig.20, 卷頭図版2, PL.22)

丘陵の削平された段の縁辺部、標高25.0m地点で検出された。隅丸長方形をなし、北東側で幅が広い。長軸1.47m、短軸0.78~0.85m、残存する深さは最深で0.14mを測る。木棺の痕跡等は確認されなかった。北東短壁近くで青磁碗1点が、上壙墓中央側に傾斜して出土し、副葬品と思われる。北東が頭位方向であろう。

龍泉窯青磁碗は完形で、輪蓮弁19を削り出す。胎土は灰白色で精良、釉薬は緑色を呈す。主に口唇付近に買入がみられる。砂と粘土で作った円筒に載せて焼成した痕跡が高台内側に残っている。器高6.5cm、口径16.6cmを測る。

青磁碗より、SK-01は13世紀後半に位置づけられる。

SK-02 (Fig.20, PL.23)

丘陵麓近くの調査区の端、標高16.6m地点で発見された。一部しか調査していないが、土壙墓と思われる。覆土より瓦器、磁器片等が出土した。木棺の痕跡等はみられなかったが、第4層の出土遺物が副葬品であろうと考え、図示に耐える2点を示す。

1は捏鉢であり、よく焼き縮まっている。10分の1周程度しか遺存せず、底部は全く失われているが、口径26cm程度に復元できる。

2は土師皿である。口縁部の一部欠損を除けばほぼ完形だが、摩滅が著しい。

SK-02は、12世紀半ば頃に位置づけられる。

SK-01やSK-02の存在から、丘陵の、既に削平を受けた部分にも、このころの墳墓が営まれていた可能性が考えられる。

(2) 井戸

SE-01 (Fig.21, PL.24・25)

谷部の標高17.3m地点に所在し、確認面で径2.5m、最下部で径1.3m、残存する深さ2.6mを測る。半ば以上でやや幅を増している。高い位置で横方向の小穴が数カ所あり、最下部でやや幅を広げる。素掘りの井戸であろう。第1層は軟質の灰褐色土層である。第2層は1層に黄褐色粘質土が少量混ずる土層である。第3層は黄褐色粘質土層である。第4層は淡黄褐色土層である。第5層は1層と2層を混ぜた土層である。第6層は灰褐色粘質土層である。第7層は1層、2層、3層を混ぜた土層である。第8層は暗灰色粘質土層である。第9層は粗砂を多く含む灰褐色砂質土層であり、瓦器碗はこの土層から出土した。第10層は黄褐色土層である。第11層は黄褐色砂質土層である。第13層は暗灰色粘

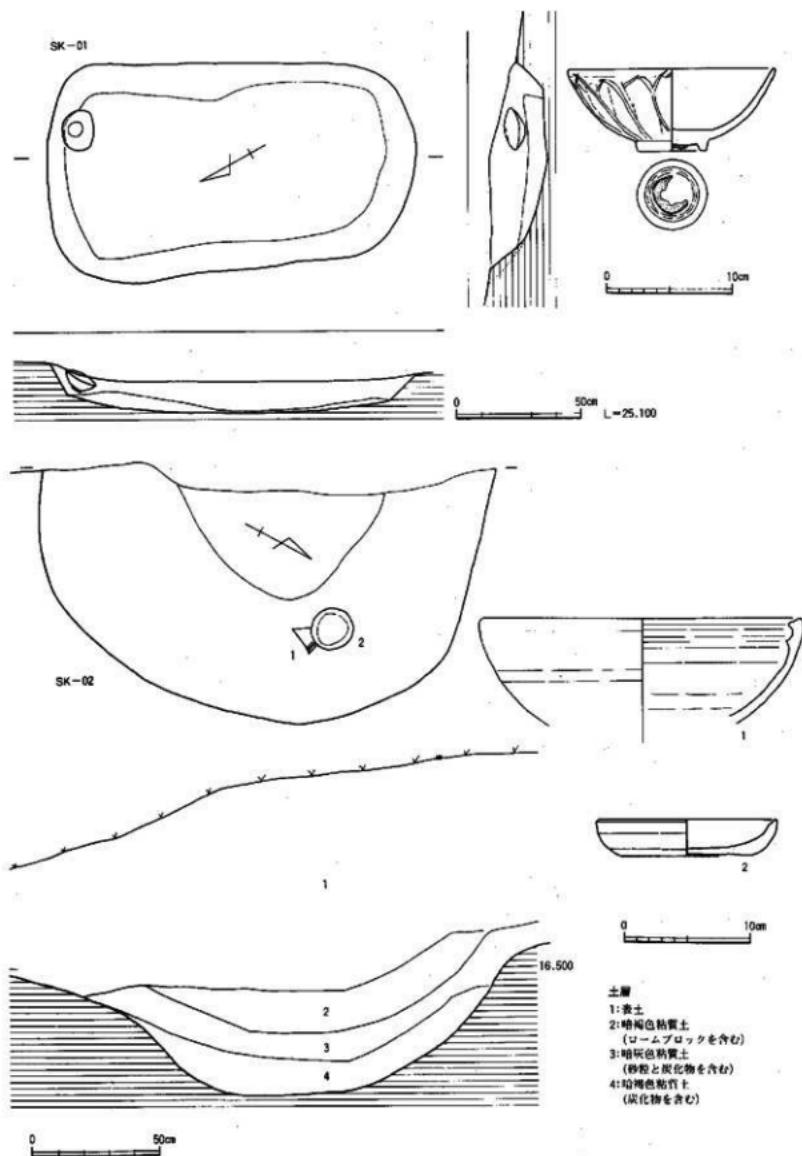


Fig.20 SK-01-SK-02出土状況 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)

質土層である。第14層は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土を混する。第15層は暗褐色ないし黒褐色上層である。第16層は茶ないし灰褐色砂層である。第17層は暗黒褐色粘土層である。第18層は黒褐色粘土層である。第19層は灰白色砂層である。なお、第12層は調査時に注記していない。土層は、下層の19層、18層ではほぼ水平に堆積し、井戸としての使用にかかる層と思われるが、中層は暗黒褐色、灰褐色などの粘質土が下に凸の層をなしている。上層は灰褐色土である。また、中層・上層の壁際には、黄褐色を主体とする砂質土、粘質土の層がある。堆積の様相と、上に開く断面形状、壁際の黄褐色砂質土層・粘質土層の存在から、この井戸は、廃棄後に中層以上が自然に埋没したものと考えられる。

ただ、調査期間中の異常な多雨（梅雨明け宣言が撤回された）によって、わずか数週間でSE-01が埋没してしまったところを見ると、自然景観や人間の対応が異なるとはいえ、当時においても、井戸が自然堆積によってすべて埋まってしまうまでの時間は、あまり長くなかったであろう。

覆土中より、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器が出土した。

須恵器・土師器・陶磁器は主に下層から出土した。1は土師皿である。摩滅は著しいが、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。2は十指窓と思われる須恵器甕の口縁部である。口縁部は平行タタキ後回転ナデ、胸部は平行タタキを残す。口縁部内面と胸部外面に自然釉がかかっている。3は褐釉陶器であり、福建省産の四耳壺の可能性がある。外面は釉薬の流れた痕跡のみが残り、内底面には流れた釉薬がたまっている。外側は全体にケズリが行われている。4は青磁碗で、同じく福建省産かと疑われる。胎土は白色で、黒色粒子を含む。釉薬は淡い黄緑色を呈す。口縁部は玉縁状をなし、外側はヘラケズリを行う。

瓦器碗（5～10）は主に中層から出土したが、土層断面図に示すとおり、9層の相接する位置に集中している。完形品があり、時期的にまとまっているので、一括性は高そうである。井戸の埋没中にまとめて投棄されたのだろうか。摩滅は進んでいるが、ヘラミガキの痕跡をとどめるものもある。色調は灰白色を主体とするが、口縁部や体部の一部などが黒色を呈するものもある。焼成時の重ね焼きの結果であろう。互いに酷似するが、口縁部形態（丸、面取り、角張る）、腰の有無、高台の形態（薄い台形、つぶれた台形、低い三角形）によって微差がある。

I類：口縁部が丸く、体部外面の稜で腰をなし、高台断面は薄い台形（9）

II類：口縁部が面取り、体部外面の稜で腰をなし、高台断面は低い三角形（5・10）

III類：口縁部が面取り、体部は明瞭な腰をなさず、高台断面は低い三角形（8）

IV類：口縁部が面取り、体部は明瞭な腰をなさず、高台断面はつぶれた台形（6）

V類：口縁部が角張り、体部は明瞭な腰をなさず、高台断面はつぶれた台形（7）

これらは、属性の組み合いで方からみて、ある程度時期差も反映しそうであるが、出土状況から考えて、近接した時期における製作者の別を示すのかもしれない。

出土遺物より、SE-01は12世紀前半頃に位置づけられよう。

井戸の存在から、谷部を中心に、この時期の集落が営まれていたことが推測できる。

（3）包含層ほか

谷部の遺構検出時に、茶褐色土層から中世の遺物が若干出土した。そのなかに青磁碗の破片があり、SE-01と近い時期に比定される。

谷部から南は時期不明の建物やピットが散在しているが、これらはSE-01に前後する時期のものも含んでいるはずである。谷部には中世の集落が存在したと考えられる。

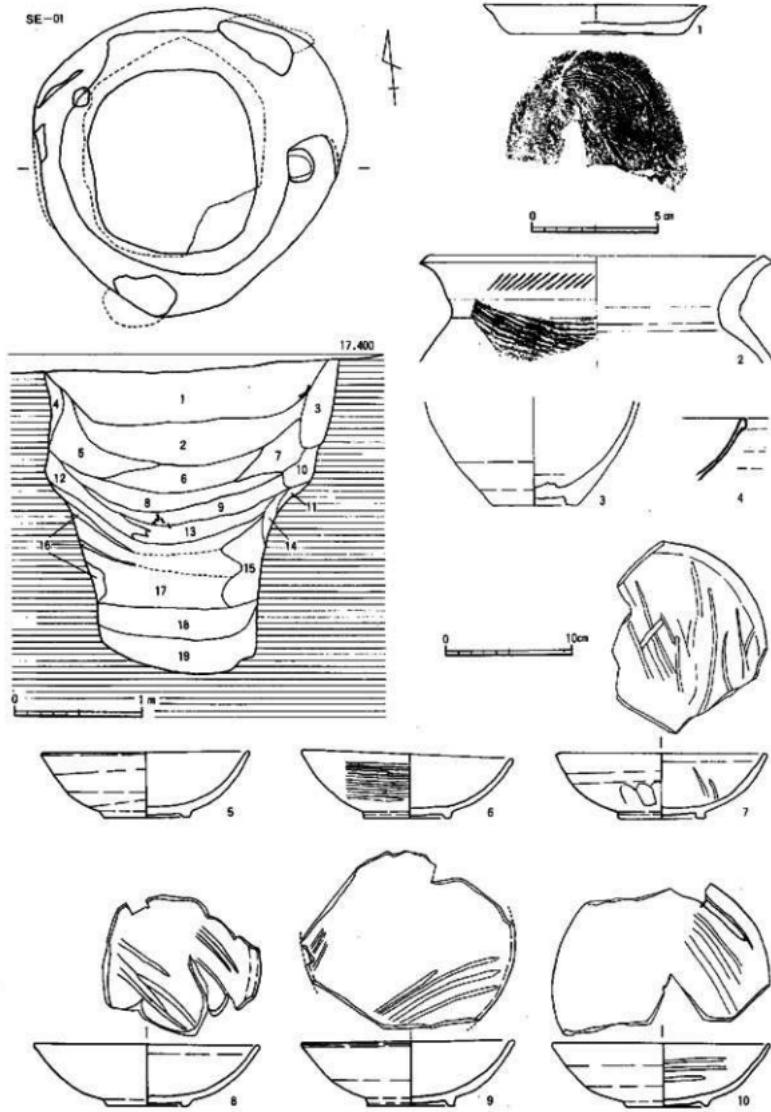


Fig.21 SE-01出土状況(1/40)、出土遺物実測図(1/2.1/4)

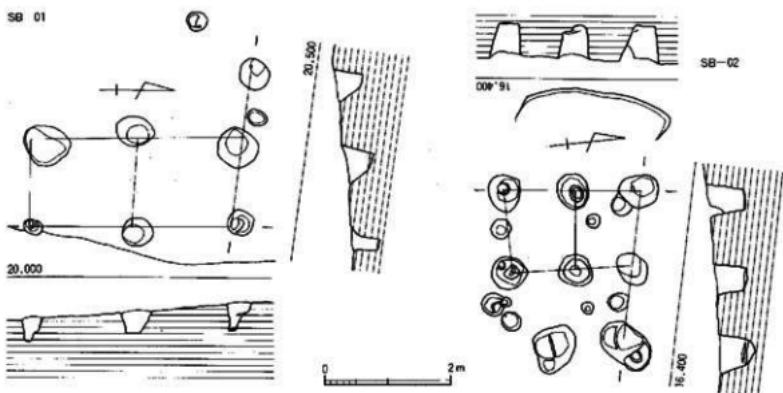


Fig.22 SB-01・SB-02出土状況実測図 (1/80)

4. その他の遺構・遺物

(1) 堀立柱建物跡

S B - 01 (Fig.22, PL.26)

丘陵斜面の標高19.0～19.8m地点で検出された。2間×1間は確実だが、すぐ東側が大きく削り取られているので、本来はさらに大きかったであろう。南北は1.6m間隔、東西は1.4m間隔で柱が配置されている。柱穴から須恵器大甕の胴部破片が出土した。

S B - 02 (Fig.22)

丘陵の麓、標高15.6～16.2m地点で検出された。2間×1間は確実であろう。西側の高い部分に、地山を平らに整形したところがあり、S B - 02に関わるものかも知れない。柱穴からわずかに土器片が出土したが、図示に絶えず、時期も不明である。

(2) ピット群

谷部から丘陵の麓にかけて、多数のピットが検出された。時期の明確でないものが大半だが、同時期の遺構の存在する弥生後期や中世のものが多い。一部に古墳時代の須恵器片を出土するピットがあり、試掘時にも麓部分で須恵器が出土しているが、明確な古墳時代の遺構は検出されなかった。

V まとめ

1. 葬棺墓の主軸方向と配置 (Fig.23)

今回の調査で第1次調査の葬棺墓群の広がりを捉えることができた。今回の調査地点での葬棺墓群の様相は、基本的に第1次調査地点のそれと一致している。K-1が今回調査での最古の葬棺であり、汲田式に位置づけられる。その後立岩式に至るまで葬棺墓が盛んに造営されている。席田青木遺跡に

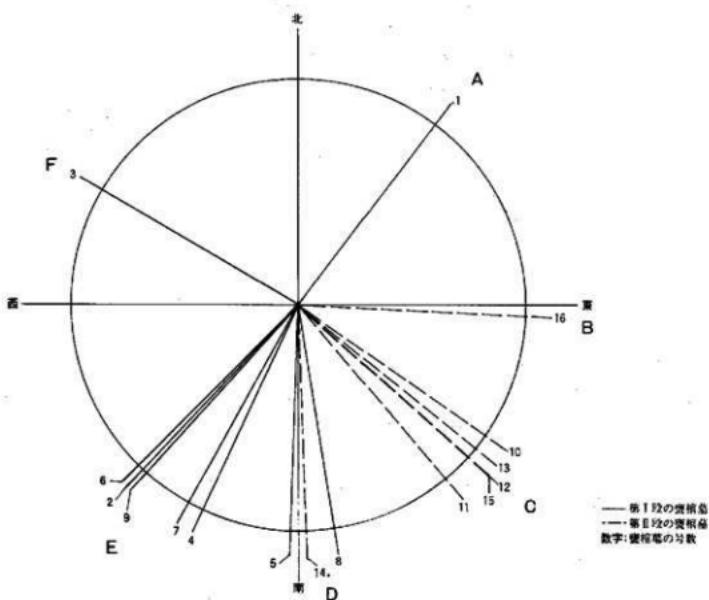


Fig.23 墓格墓の主軸方向

数カ所存在する墓格墓群の一つが今回の調査分に当たるだろう。

今回調査の墓格は主軸方向により、さらに6小群に類型化できる。

A小群：主軸を北東に向ける（K-1／第Ⅰ段）

B小群：主軸を東に向ける（K-16／第Ⅱ段）

C小群：主軸を南東に向ける（K-10、K-11、K-12、K-13、K-15／第Ⅱ段）

E-35°-SからS-40°-Eまで25°

D小群：主軸を南に向ける（K-5、K-8、K-14／第Ⅰ段と第Ⅱ段の両方）

S-9°-EからS-2°-Wまで11°

E小群：主軸を南西に向ける（K-2、K-4、K-6、K-7、K-9／第Ⅰ段）

S-25°-WからS-45°-Wまで20°

F小群：主軸を北西に向ける（K-3／第Ⅰ段）

同一小群同じ段の墓格が集中する現象がみられる。C小群=第Ⅱ段、E小群=第Ⅰ段の組合せである。特にC小群の5基のうちK-15を除く4基が隣接して検出されたことは、主軸方向や造営地点の選択が偶然なされたのではなく、何らかの秩序を内包することを示しているよう。現状の各段は、墓格墓造営時には存在しなかったとはいえ、ほぼ水平面をなすので、段と主軸方向の相関関係は、造営地点の高度と主軸方向の相関関係と見做すことができる。

改めて6小群全体を見渡すと、墓格の主軸方向は南優位を示し、第Ⅰ段の墓格は西偏、第Ⅱ段の墓格は東偏の傾向を有する。南を向くD小群のみが、第Ⅰ段と第Ⅱ段の両方の墓格を含む小群である。

北寄りに向く△小群のK-1、F小群のK-3は、調査区の北寄りで互いに近接し、丘陵の頂部に近い。また、K-1は時期もずれる。東を向くB小群のK-16も、離れた位置に造営されている。したがって、△・B・F小群は今回の調査範囲では評価が難しい。

甕棺5基ずつからなるC小群とE小群は、造営された段と上軸方向でそれぞれまとまりをもつ。造成のため失われたはずの多くの甕棺墓を再現できない以上、両小群が本来いかなる配置をなしていたか知り得ないが、少なくとも、C小群とE小群が本甕棺墓群の基本的な構成単位であり、D小群は何らかの理由で両単位間を横断ないし超越した小群であるといえよう。

2. 弥生後期・古墳時代・中世の集落

今回、谷部と拡張区の調査により、ここに弥生後期・古墳時代・中世の集落が存在したことも推定できるようになった。ただし、集落の範囲や構造、その詳しい消長などは、未だ不明な点が多い。

弥生後期の集落の存在は、拡張区の土坑（SK-03）や溝（SD-04）から推定される。丘陵尾根上の中期甕棺墓群と、麓の後期集落との間をどのような関係で捉えるか、今後の課題であろう。

古墳時代の集落は、遺構としては認識できないものの、須恵器片や上帥器片の存在から推定される。実態は不明である。第1次調査で検出された、7世紀中葉～後半の古墳の存在を考え合わせると、今後古墳時代の墳墓・集落の展開も追究されるべきであろう。

中世の集落は、谷部の井戸（SE-01）や包含層から推定されるが、わずかに知られる年代比定資料からは、ほぼ12世紀前半頃と思われる。谷部のピットは、時期不明のものが多いが、密度が薄く、そうした点から考えて、中世の集落の存続期間がかなり限定されたものだったか、あるいは、集落の中心が今回の調査範囲から外れた位置（例えば東側など）にあったものと思われる。

3. 中世の墳墓

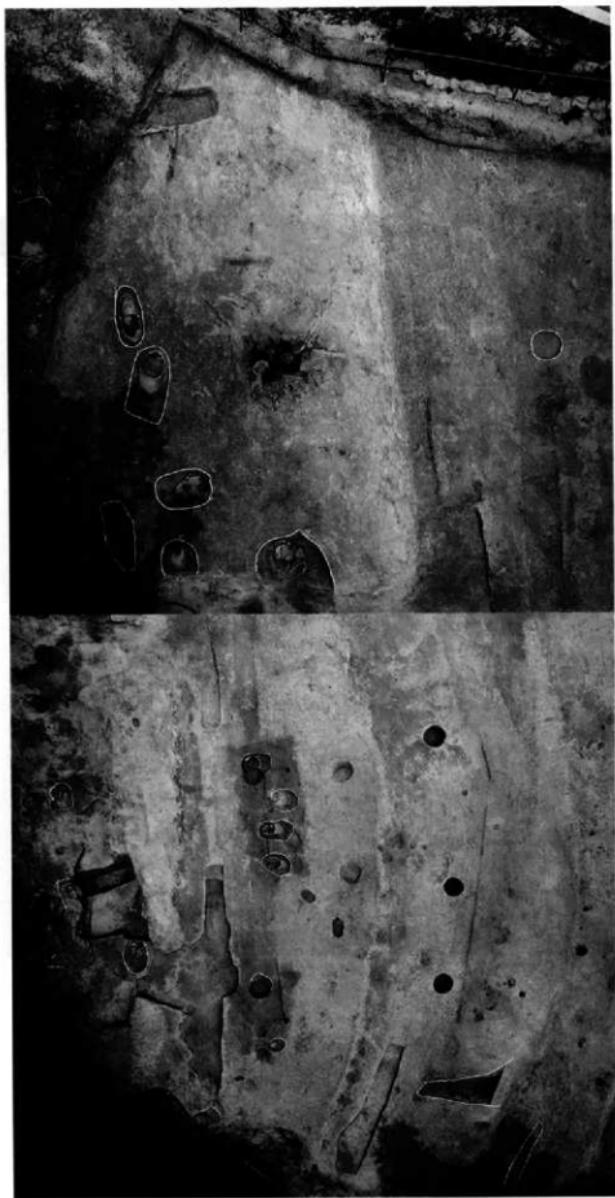
今回中世の土壙墓が2基検出されたが、いずれも旧地形がさほど変形されていない地点（階段状に削平された段の縁辺や、丘陵の麓近く）に所在し、造成以前にはより多くの中世土壙墓が存在したとみられる。SK-02は12世紀半ば、SK-01は13世紀後半に位置づけられ、奇しくもSE-01に後続する時期である。失われたであろう土壙墓の存在も勘案すると、12世紀前半頃の短い期間で中世の集落は廃絶ないし縮小し、12世紀半ばから13世紀にかけては主に墳墓を営む地としてこの地が利用されたことを示していよう。

PLATE 図 版





調査区全体写真



斎棺墓の
配置



谷部



抜張区
(東から)



K-1 出土状况



K-1 下要



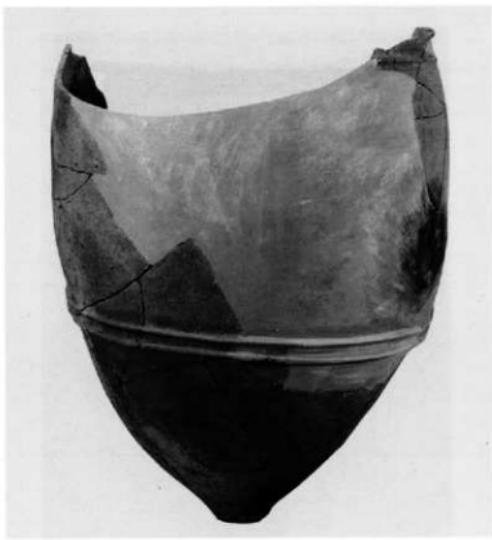
K-2 出土状况



K-2 下壳



K-3 出土状况



K-3 下要



K-4 出土状况



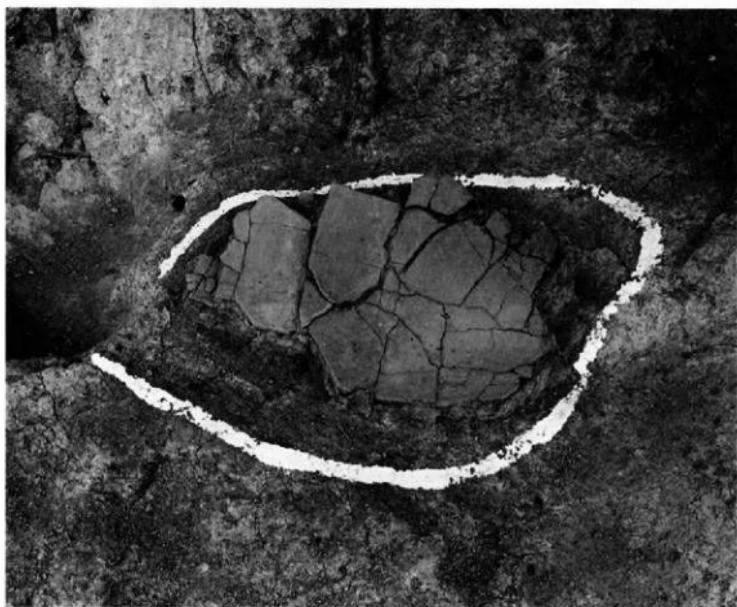
K-4 下部



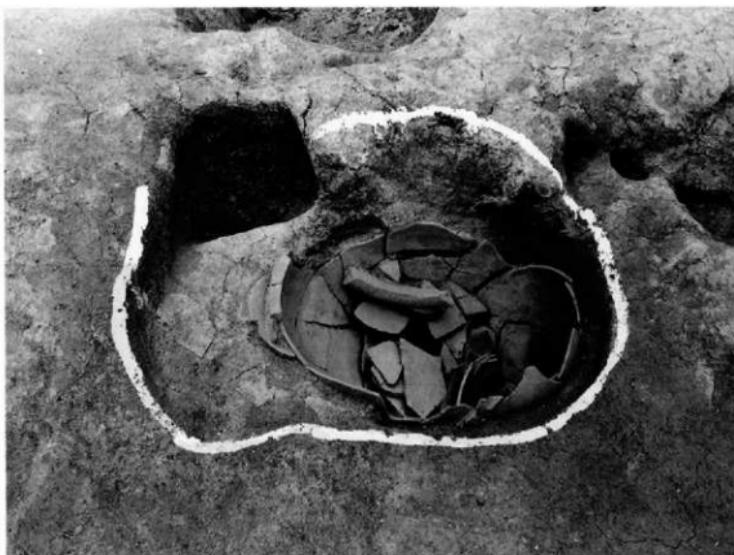
K-5 出土状况



K-5 銅盤



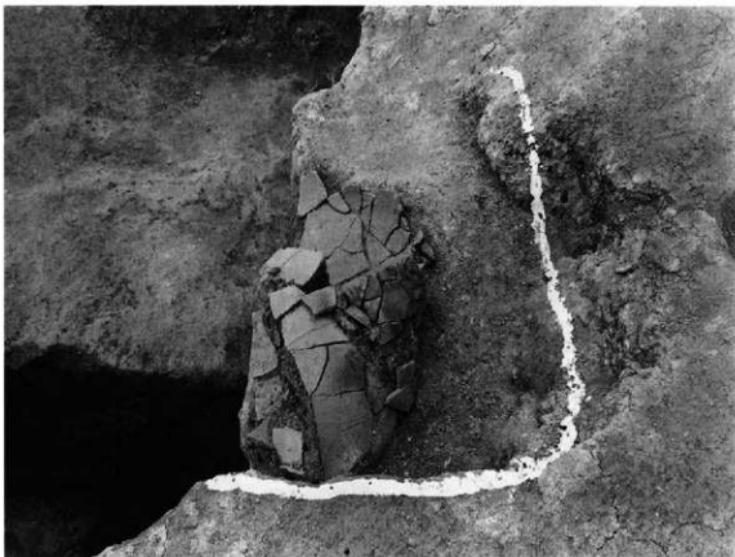
K-6 出土状况



K-7 出土状况



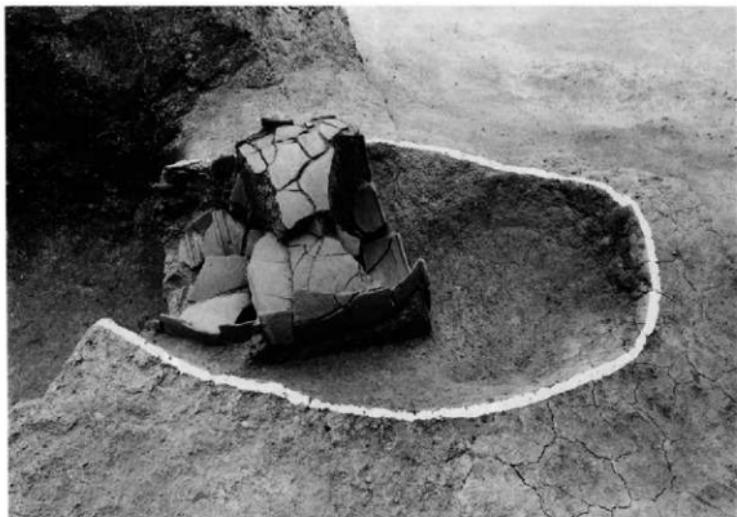
K-7 壶棺



K-8 出土状况



K-8 下隻



K-9 出土状况



K-9 麽棺



K-10 出土状况



K-11 出土状况



K-11 瓷棺



K-12 出土状况



K-12 上部



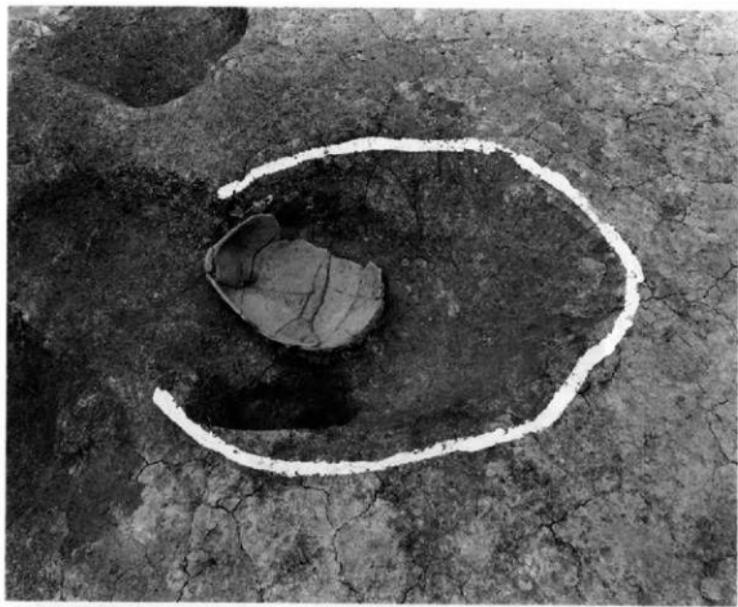
K-13 出土状况



K-13 下施



K-14 出土状况



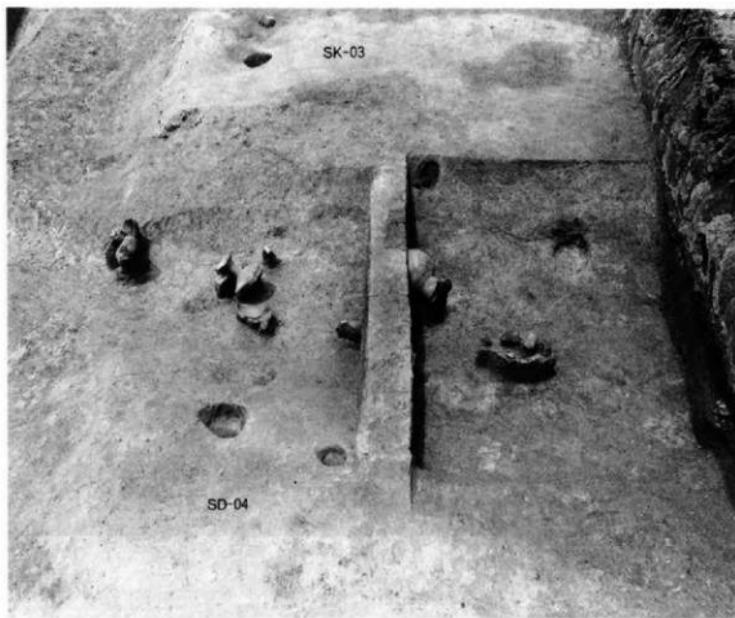
K-15 出土状况

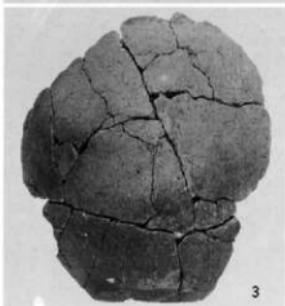
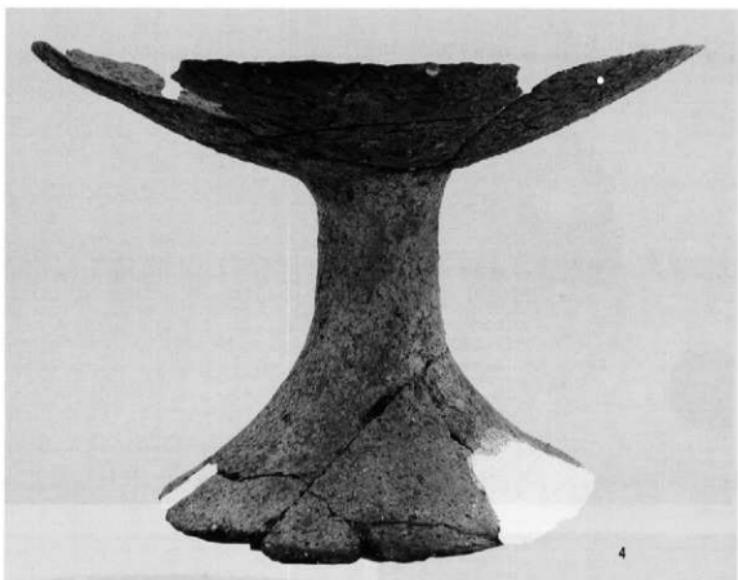


K-16 出土状况



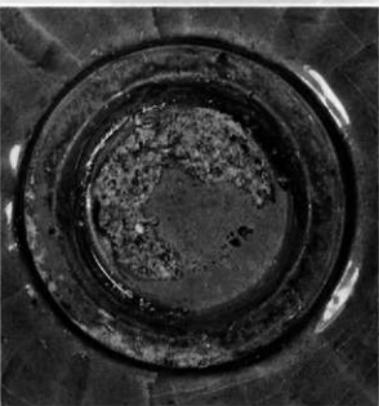
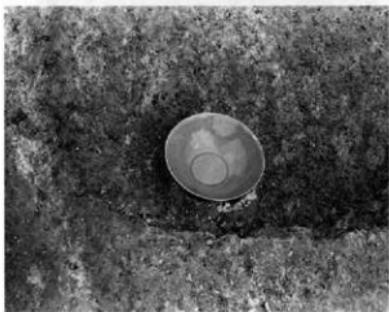
K-16 下覽

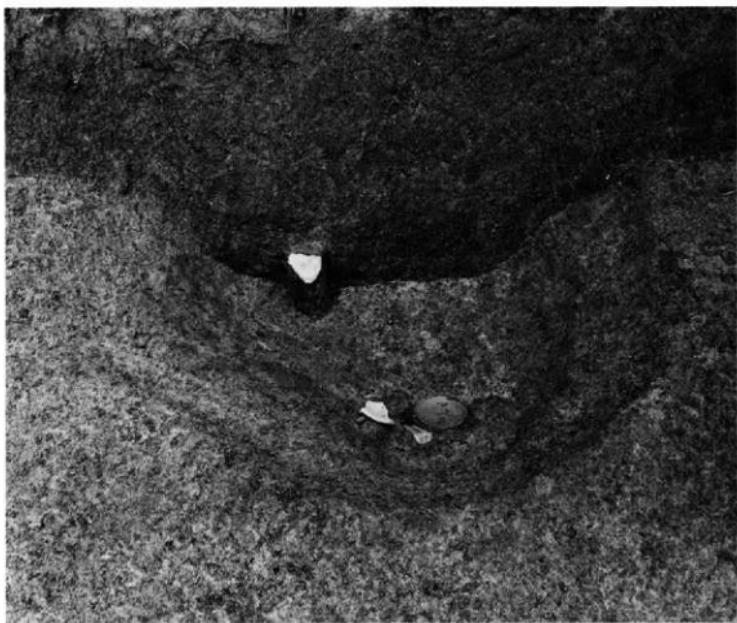




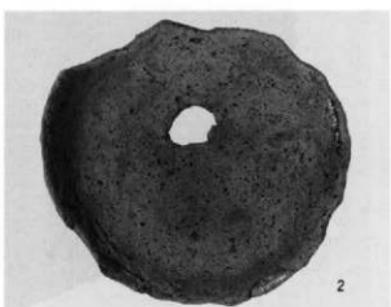
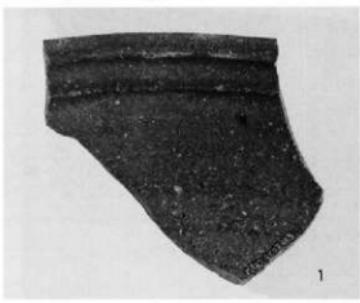


SK-01 出土状况





SK-02 出土状况

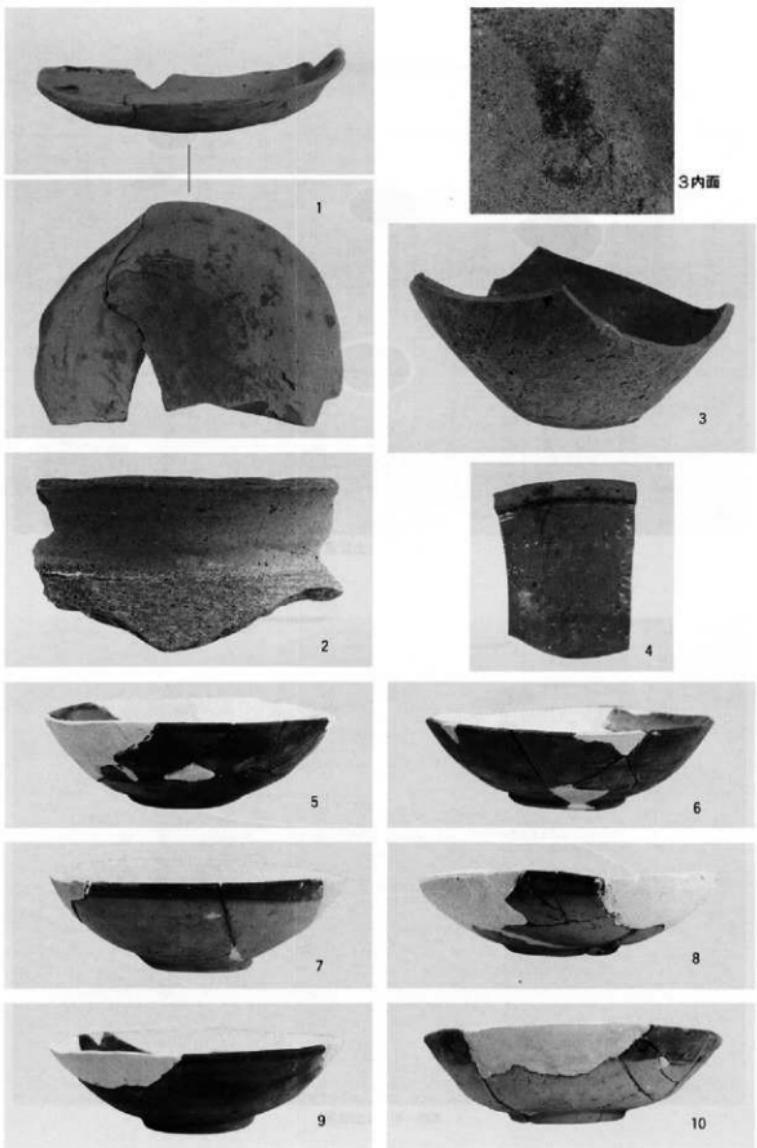




SE-01 出土状況



SE-01 土層断面





SB-01 出土状况



SD-01 出土状况

席田青木遺跡2
福岡市埋蔵文化財調査報告書第408集
平成7年(1995)3月31日
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
(092)711-4667
印刷 福博綜合印刷株式会社

